
新説！？竹取物語

したらば13号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新説！？竹取物語

【Nコード】

N6390E

【作者名】

したらば13号

【あらすじ】

屋上で見た流れ星は、何と月の（元）お姫様だった！？ひょんなことから彼女を拾った讃岐宮彦は、彼女を巡るライバル（？）との争いや、彼女の巻き起こすさまざまな災難に巻き込まれていく・・・のか！？ほのぼのラブコメ風味です。ラブコメになり切れてないかもです。

【第一話】降って湧いた災い

災いは急に天から降ってくるものだ。

まだ幼かった頃、それこそ記憶も曖昧な昔に祖父がそんな事を言っていた気がする。

「だったらさ・・・こういう風にしてればその災いってヤツが落ちてくるのを見るのかな・・・」

今は亡き祖父を想いながら、彼はそんな戯言をボソリと呟く。

自分でも馬鹿げていると分かる戯言を、だ。

目の前には、空。

背中には、太陽に熱せられてじんわりと熱を帯びたコンクリートの天井の無機質な、しかし暖かい感触。

管理委員長とかいう訳の分からん身分だからこそできる、役得というやつだ。

クラス全員の陰謀により任命された当初はどうなるものかと思っていたが、委員長と言う肩書の割に、主な仕事は教室の施錠のみ。

たまに意味もなく（無論教師の方はそんな気さらさら無いが）呼び出されたりするだけで、他に面倒な仕事も無いのにこの屋上を独占できるのは大きい。

「しかし・・・」

こうして屋上に寝そべって空を仰いでいると、ふと自分が空へと落ちていくような　いや、吸い込まれる、と言った方が正しいか　そんな感覚に捉われる。

そんなはずはないのに。

重力がある限り、この星に足がついている限り、そんな事はある得ないのに……

だとすれば、地球から重力が無くなれば、やはり自分はこの大空へと吸い込まれていくのだろうか……？

半分惰性的な思考を巡らせていると、彼は視界の隅で何かが光るのを見た。

「……ん？」

その光を彼が見ることが出来たのには、偶然の要素が大きい。

もし少しでも彼の頭の角度が違えば、その影すら見る事もできなかっただろう。

「流れ……星だよな……」

どう見ても先ほどの光は流れ星のそれだった。

しかし、こんな真昼間に流れ星が拝めるとは……

「今日は案外……ツイてるかもな」

確か朝のニユースの星座占い、天秤座は一位だった。

別の番組の血液型占いも、A型が一位だった。

「願い事言つときゃよかったな……」

かすかな後悔を残しつつ流れ星の流れた方向を見遣ると、丁度学校裏の竹藪であった。

「……まさかな」

ほんの少しの胸騒ぎを覚えつつも、ゆっくりと彼は上半身を起こす。

『二年D組、讃岐宮彦君、至急職員室まで……』

「はいはい、今行くつてば……」

もはや籠こもった音しか垂れ流さない、古びたスピーカーから聞こえてきた自身の名前に比較的ゆっくりと反応しながら呼ばれた当人

讃岐宮彦 は、校舎へと姿を消す。

まさか、本当に災いというやつが天から降ってきたとも知らずに……

数時間後、すでに太陽が眠りにつき、月が夜空に我が物顔で鎮座しているその時。何故か宮彦は裏山の竹藪の中にいた。

「何故か」と問われても、宮彦自身にも「何故なんだろう」としか答えられない。

そもその間違いは、昼間の流れ星の存在をクラスメイトに漏らしてしまったことが。

いや、祭り好きの悪友が先頭に立ち、「じゃあ竹藪探してみようぜ」などと血迷ったことを言い出したのを、止めなかった事が悪いのだろうか。

ともかく、宮彦は数分前まで共に流れ星を探していた友人ともいつしかはぐれ、完全に遭難していた。

昔から宮彦の家の持ち物だったこの竹藪の事は、幼少から遊んで来た宮彦ならば獣道に至るまで全て知り尽くしている・・・はずだった。

「おつかしいな・・・暗くて周りが・・・」

しかしそれも昼の話。

光の量が全く違う夜は勝手が違ったようだ。

携帯で連絡を取るうにもかなり深いところまで来てしまったらしく、普段三本の線が走っている場所には、「圏外」の文字がむなしく浮かんでいる。

この分では、他のヤツも二、三人迷子になってるかも知れない。と、その時であった。

「・・・うん？」

竹藪の合間から、光が見えた。

月明かりなどではない。明らかに人工のものだ。

「街の明かりか、良かった・・・」

これで少なくとも遭難の危険性はなくなったと言って良い。

宮彦は安堵の息を吐くと、明かりの方向へ歩き始める。

これで家に少しでも近づいたと思うと、俄然やる気が湧いてきた。力強く土を踏みしめ、竹を掻き分け、宮彦は明りに向かい進む。やがて近づくにつれ、光がだんだん大きくなってきた気がする。あれ、街の光ってこんなに強かったけ・・・

そんな疑問を感じ始めたころには、もう光のすぐ近くまで来ていた。

この竹の向こうに、どうやら光の源があるようだ。

かすかな疑問を抱きながら、竹を掻き分けて、光源に近づく。

「な・・・何じゃこりゃ・・・」

突然宮彦の目に飛び込んできたのは、地面に半分程埋まった巨大なカプセル。

それは、目もくらむような眩い光を放っていた。

大きさは地面に露出している分だけで彼の背丈ほどもあり、一見すると棺のようにも見える。

周囲の地面が大きく陥没し、表面が微妙にすすけている辺りからして、どうやらあの流れ星は、このカプセルらしい。

もし宮彦が普段の通りなら、驚きと共に、一種の喜びを感じていたであろう・・・がしかし。

「てことは・・・さっきまでの明かりはコイツってことかよ・・・」
つまり、遭難しているという事態は全く好転していないわけで・・・

「う・・・うそだろ」

その場できつくりと膝を付きうなだれ、脱力する宮彦。

先ほどまで足に入っていた気合いが、凄まじく無駄なように思えてくる。

何故こんな紛らわしい光を出すのだろうか。

いや、そもそもコレが落ちてこなかったら、自分はこんな目に遭

ってはいなかったのではないか。

そう思うと、だんだん腹が立ってきた。

怒りをぶつける対象は、無論目の前のカプセルである。

「こんなモノがなければ・・・！」

怒りの声を放ちながら、力任せにカプセルの壁面を蹴る。

すると、宮彦の蹴った部分がまるで敷石が脱落するように、不自然に陥没した。

それと同時に、今まで沈黙を守り続けてきたカプセルから駆動音が聞こえてくる。

もしかしたら自分とはんでもない事をしてしまったのではないか。感情になりふり任せて振舞っていた宮彦は、その行動に今更ながら後悔を覚える。

やがてカプセルから空気の漏れるような音が聞こえたかと思うと、ゆっくりとその扉が開いていく。

その様子を、宮彦は緊張した面持ちで見つめる。

扉の中から現れたのは、長い長い、黒髪。

着物の裾を風に流しながら、扉に手をかけたそれは、ゆっくりと伸びをする。

「ん・・・やはり久しぶりの地球の空気は美味じゃのう・・・あの狭く苦しい月なんかとは大違いじゃ。さて・・・」

それは、月の光を背負いながら。

「おい、その方、名は何と言う」

それは、不遜な物言いだ名を尋ねながら。

風が、静かに、しかし力強く竹の葉を揺らした。

それが、宮彦と、いわゆる災いと初めての出会いであった。

【第一話】降って湧いた災い（後書き）

今まで書いたことのないジャンルなのでギャーな感じです（汗

拙い文章ですが、楽しんでいただけると幸いです。

【第二話】災いの正体

「んゝ．．．ああ．．．嫌^ヤな夢見たなあ．．．」

何かとてつもなく滑稽な、しかしとてつもなく恐ろしい悪夢から目を覚ますと、宮彦は着替えのため、体のあちこちに湧いた痛みを押し殺して立ち上がる。

なれない布団で久しぶりに寝たせいだろうか、それとも昨日竹藪を這いずりまわったせいだろうか。

こういう時、今日が休日で良かったと心底思う。

ふと、堅い床で寝る羽目になったその元凶を見遣る。

「うゝん．．．うう．．．堅い．．．寝床が堅い．．．」

長い黒髪の少女が布団を肩のあたりまでかぶったまま、うんうん唸っている。

柔らかい方の寝床を譲り、自らの体を痛めたというのに、こいつは寝言でまで文句を言うのだろうか。

確か昨夜寝る前にもベッドの堅さに関して文句をぶーたれていた“それ”に、宮彦はふつふつと怒りがこみ上げてくるのを覚える。

おい、その方、名は何と言う。

やはり自分がこういう目に遭うのは、昨日目の前の少女が言ったその言葉に、「さ、讃岐宮彦だ．．．」と素直に答えてしまったのがいけなかったのか。

と、宮彦はやはり今更ながらも、後悔の念に捉われる。

あの夜　　というか昨日　　月光を背負って現れた少女は、何故

かそのまま付いて来て、宮彦の家に転がり込んできてしまった。
彼女の言うところによると、「妾^{わらわ}を拾ったそなたの宿命」というものらしい。

なんともはた迷惑な宿命だ。

出来る事ならこんな宿命を作った神様に不良品として送り返してやりたい。

コイツもまとめて今すぐに。

事情も詳しく聞かずに泊めてしまふ宮彦の親も親である。

「あら、かわいそうに・・・ウチで良ければいつまでも泊って行きなさい」と、なにも聞かずに家出少女と決め込んで家に上げてしまった。

人一人を、である。

ペット飼うのとは訳が違うのだ。

食費だってその他の費用だって馬鹿にはならない。

父も宮彦と同じく反対すると思いきや、あっさりと了承した。
といっても数日間だけなら・・・という条件付きであったが。

「ん・・・ん・・・」

と、宮彦が思案にふけっていると、後ろで人の動く気配がする。

「ああ、アンタ、起きたのか。早速だけど話を・・・」

振り向いて少女に話しかける。

・・・と、そこで宮彦は硬直する。

「ん？ どうした？ 妾の顔に何か付いておるかの」

大きくはだけた寝巻きの胸元に、太ももまで露わになっている脚。

これは、生で見るにはいささか刺激が強過ぎた。

「だ・・・だあ！ 何でそんな格好なんだよ！ とつと・・・

とつとと服着ろ！」

耳まで真っ赤になりながら、宮彦は慌てて反対の方向を向く。

「・・・？ この格好の何がいかんのかのう・・・」

数分後、聞こえてくる衣擦れの音に宮彦はまた顔を赤くしたり、「照れておるのか？」などの少女のちょっかいを受けた後、二人は向き合っていた。

「さて・・・じゃ、色々と質問に答えてもらおう」

「？ 何故じゃ？」

「何故じゃ・・・って、まだ俺の方はアンタの名前も知らないんだが？」

あの後、宮彦が名乗った後、彼女は「早く貴様の家に連れて行け」と言い出し、「詳しい説明は後でしてやる」と言いながら、その後何とか数十分かけて家に辿り着いたと思ったら、「妾は疲れた、寝る」と、他人の家ではあるまじきことを口走り、同情した宮彦の母が勝手に宮彦の部屋に上げ、ベッドで寝かせてしまったのだ。

と、いうことで、宮彦は未だに少女の事については「カプセルから出てきた変な少女」という事しか分からないのだ。

「ふむ、そうだったかの」

「そうだったんだよ」

「まあ、いい、妾は月の都の姫、名は・・・そうじゃな、こちらでも分かりやすいように、カグヤ・・・としておくかの」

「・・・月の都」って、何？ キヤバクラかなんか？ 姫・・・
ってことは人気ナンバー１とかそういう・・・」

「きゃばくら？ 何じゃそれは」

「どうやら違うらしい。」

「いや、まさか本当に月に人がいるわけがないし・・・」

「月の都について貴様ら一般庶民が知らんのも無理はない、か」

「ふーやれやれ」といった感じで溜息をつくところや、一般庶民などという単語に宮彦は少々カチンと来たが、ここは会話をスムーズに進めるため、一生懸命怒りを殺すことにする。

「貴様らは知らぬかも知れんが、月には人がある。空気もある。そして貴様らより技術の面で幾ばくも進んでおるのじゃ」

「へ……？」

月に……人？

どうやら彼女　カグヤとかいったか　は、墜落のショックで少々頭がおかしくなってしまうらしい。

どうやってたらあの月に人が住めるというのだろうか。

あんな空気も何も無いような場所です。

「その目……疑っておるのか。まあ、いい……普通はいきなり
斯様な事を聞かされても、受け入れられぬもののよ」

そう言つと、着物の懷から細長いペンのようなモノを取り出し、
スイッチを入れる。

すると、ペンの先から放たれた光が、壁に像を結ぶ。

「何だこれ？　映写機……？」

「まあ、黙って見ておれ」

軽くたしなめられると、やがて即席のスクリーンに月が現れる。

「これが、貴様らが月とか勝手に読んでおるものじゃ」

やがて、月の表面へと画面は近づいていく。

丁度月面に画面がぶつからんとするその直前、ひび割れた地面が
不自然に浮き上がり、開口部がその姿を現す。

「な、何だこれ……」

「黙って見ておれと言つとるに……まあ、いい」

開口部にカメラは突っ込むと、内部へと進んでいく。
闇がしばらく続いたのち、画面が光に包まれる。

「……これが」

「そう、月の都じゃ」

画面に映し出されたのは、きらびやかで巨大な都市。
画面が画面なので分かりにくいだが、少なくともCGや特撮といっ
たそれらの類には見えなかった。

「ホントに……月の中にこんな……」

やがて画面は、月の内部構造を示す画面へと切り替わる。

「気温も低く、大気も存在せず、水も何も無い月面にはとてもでは

ないが住めないが、中になら住める、という事じゃ」

「いつ月を・・・こんな都市にしたんだ？」

「逆じゃ、逆」

「逆？」

一瞬宮彦はその言葉の意味するところが分からず、鸚鵡返しに答えてしまう。

「貴様らの呼ぶ月は、いわば巨大な宇宙船であった。しかし、事故によって偶然にも地球の重力につかまってしまい、今に至ったわけじゃ。表面の岩石など、カモフラージュのためにすぎん」

「な、なるほど・・・」

確かに信じがたい話ではある・・・が、このような映像、一朝一夕で作れるものではない。

「ん・・・待てよ」

と、そこで宮彦はあることに気が付いた。

「なら何故技術的にも進んでいらつしやる月の姫様が、こんなこんな辺鄙なところへいらつしやったのですか？」

わざと慇懃に、しかしイヤミっぽく宮彦は尋ねる。

「う・・・それは・・・じゃな・・・」

言い淀んだカグヤに、宮彦の疑問は一種の確信のようなものみ変わる。

今この少女はカグヤと名乗ったが、昔話においても、かぐや姫が地球に來た理由と言うのは・・・

「罪を・・・犯したからじゃ」

やはり、そうだった。

竹取物語においても、かぐや姫は月の都で罪を犯し、地球へと送られたという。

どうやら、向こうにおいては、地球行きは一種の“島流し”のよきなものらしい。

「罪に対する罰ってことは、竹取物語みたいにいつか月に帰れるんだろ。いつまでだ？」

竹取物語のように比較的短期間でカグヤが月に帰ると思った宮彦は、いつまでもカグヤがここにいるのではないという事が分かったという事だけでも安堵し、その滞在期間・・・というか刑期を訪ねた。

「いつまで・・・というものではない」

「うん？　じゃあ、ここで仕事を規定量したら・・・とかそう言う事？」

「それでも・・・ない」

少しおかしなカグヤの様子に、宮彦まで不安になってくる。

「じゃあ、どう刑なんだ？」

「無期・・・じゃ」

「は・・・？」

何ですと？

一瞬自らの耳を疑った宮彦は、もう一度聞きなおすことにする。

「今、なんて・・・」

「無期だと言ったのじゃ！」

いきなり大声を出したカグヤに少し驚きながら、宮彦は思考を巡らせる。

えーと・・・むき・・・ムキ？　無期・・・つまり、期限が無いという事で・・・

「ずっと・・・帰れないって事？」

その宮彦の問いに、彼の目の前の少女は半べそをかきながら、ただ「こくり」とうなずいた。

【第三話】 災いの付き人

「う．．．嘘だろ．．．」

「うう、本当じゃ．．．」

脱力し俯く少年に、半べそをかいている和服姿の少女。
第三者の目に、この光景はどのように映るであろうか。

痴情のもつれ？

醜く歪んだ男女関係？

どちらも似たようなモノと言うことなかれ．．．否、ずばり否である。

少年の方はいたって普通の高校生。

が、少女の方は何と月から来たというのだ。

まともな頭をしている人間ならまずこんな話は信じられまい。

少年、讃岐宮彦も、最初はそんな話は信じはしなかった。

しかし、どうやら目の前のカグヤとか名乗る少女の話は本当らしい。

高々数十分話ただけでこんな事を思うのもおこがましいが、彼女自身の立ち振る舞いに至っても、元姫と言っただけあって気品やそれらしきものは感じさせるものの、演技臭さや、いわゆる嘘の香りといったものは全く無い。

とりあえず、半べそをかくカグヤをなだめるために、話題を切り換えることにする。

「ま、まあ、親父の言う数日間までならウチでも面倒見てやれるし、な？」

「す．．．数日間．．．？　そ、それを過ぎたら．．．妾は追い出されるのか？」

この家から！？」

やたら怯えたような口調で、カグヤは急に突っかかってくる。

眼にはもはや決壊寸前といわんばかりの涙が湛えられ、今にも泣

き出しそうである。

「妾には・・・妾には最早もはやそなたらしか頼れるところがないのじゃ・・・妾はここを追い出されたら・・・いったいどうすれば良いのじゃ・・・」

一つ一つ零れ落とすように言葉を紡ぐと、そのままカグヤは泣き崩れてしまう。

うあ、マズい・・・

宮彦は心中で漏らす。

こんな所、母親に見られたら勘当ものである。

「ま、まあ、落ち付けって・・・まあ、何だ・・・一人養う為だからな・・・それなりに先立つモノも必要なわけで・・・」

そう、とりあえず当面の問題は金銭面の問題である。

まさか月から落ちてきた等と本当の事も言えず、宮彦の母により家出少女ということに勝手にされてしまっているのも非常に問題ありだが、宮彦の父は一介のサラリーマン、母は専業主婦、高校に通う宮彦と自分たち家族が食べていくだけで精一杯である。

もう一人、それも終身まで養うなど、とてもではないが不可能だ。「先立つモノ、じゃと・・・なんだ、金かねか・・・金があれば良いのか」

先ほどとは打って変わった様子で立ち上がると、カグヤは鼻歌交じりでベッドの方向へと向かう。

そこには、カグヤが持参した手荷物が置いてあった。

「これじゃこれじゃ、これがあれば妾はここから追い出されずにすむのじゃろう?」

数個の手荷物の一つから、カグヤがようやく抱えられるほどの大きさの鞆を持つてくると宮彦にそれを渡す。

「開けてみよ」というカグヤの言葉に従い、なぜこの鞆の中身が事態の解決につながるのかという疑問を抱きつつも、宮彦は鞆を開ける。

するとそこには・・・

「これ・・・何？」

引きつった顔で問う宮彦に、カグヤは満面の笑みで返す。

「ん？ 見て分からねか？ 金^{きん}じゃ、金」

小さな子どもに初めての単語を教えるようかのように、カグヤは宮彦に言う。

鞆の中には、黄金がぎつしりと、かつその価値に比べやたら乱雑に詰め込まれていた。

「いや・・・そうじゃなくて・・・なんでこんなモノ罪人のアンタが持ってるの？」

「ふむ・・・いきなり何も持たず押しかけて「養え」というのも無理な話じゃ。そこで、月の政府は持参金を持たせることにしたのじゃ」

「持参金・・・それでアンタを養えと？」

「そうじゃ。金^{かね}もなしに人を養うのには無理があるからの。さて、これで一挙に問題解決。腹も減ったし、朝餉^{あさけ}に参るぞ」

「あ・・・ちょ、待・・・」

いきなり元気を取り戻したカグヤは、宮彦の制止も聞かず、階下へと姿を消した。

「話の続きなんだが・・・」

「うん・・・？」

茶碗によそった白米を箸^{ついは}で啄みながら、カグヤは「面倒臭いの」と愚痴りながら、宮彦の問いに答えるために一度箸を置く。

土曜の十時、食卓には、宮彦とカグヤの二人だけ。

宮彦の父は朝早くには出勤しており、母も今日は用事があるとかで七時頃から居ない。

「いや、だからな。なぜ罪人のアンタが金^{きん}なんてものをもってるかについてだが」

「はあ……だからそれは先にも申した通りじゃの、何も持たずにいきなり……」

「いや、そうじゃなくてだな……」

カグヤの本日二度目の説明を、宮彦は遮る。

「これがあればウチじゃなくても引き取ってもらえるんじゃないのか？」

先ほどカグヤは「頼るところが宮彦しかない」と言った。

しかし、これほどの量の金塊を持参していけば、少女一人ぐらいどこでも養えると思うのだが……

「それは無理じゃ」

きつぱりとカグヤ。

「え……なんでだよ」

率直な疑問を宮彦もぶつける。

「それはじゃの、基本的に我らは最初に拾ってもらった者の世話にならねばならないのじゃ。それが唯一にして絶対のルールでの、それができないものは金も没収……何にも頼らず一人で生きていけ……という事になる」

「うん？　ちよつと待て……ルール云々《うんぬん》以前にどうやってそれを確認するんだ？　それに金塊は誰が没収するんだ？」

先ほどカグヤは確かに“没収”と言ったが、カグヤ以外にあの力プセルから出てきた者は居ない。

また、カグヤを拾った人物の家にカグヤが住みついているか、どのように確認するのであろう。

「ふむ、本来ならば監視役がお主の家に引き取られるまでは同行し、その後定期的に給付金と共に抜き打ちで預けられた家を訪問する……ハズじゃったのじゃ」

「ハズだった……？」

どういうことだろう。

何か不測の事態でも起きたのだろうか？

「じゃあ、さ……なんでその監視役とやらは居ないんだ？」

「ん？ ああ、監視役のカプセルの突入角が小隕石の飛来で狂つての。本来なら監視役のカプセルの中に積んである金を使うのじゃが、不測の事態のために別に用意してあった金を使う羽目となった」

「・・・で、その監視役は・・・？」

「さあ、の・・・地球の南米辺りの方向にカプセルが突入していくところまでは見たのじゃが・・・」

哀れ、監視役。

南米辺りに不時着して、わざわざ地球まで来たのに、目的地からはるか離れた場所で苦勞を被っているであろう監視役に、宮彦はしばし黙禱を捧げる。

「まあ、コイツがある限りこちらの位置は把握しておるじやろうし、すぐに代理の者がくるであろうの」

そう言つと、カグヤは右腕を重たげに持ち上げ、その手首に付けられた鈍色にひいろの腕輪を示す。

「この中には発信機が埋め込んであつての。妾の位置は月の連中には筒抜け・・・というわけじゃ」

「ふーん・・・」

「なるほど」と宮彦はひとしきり彼の知らなかった事の顛末てんまつを理解すると、もう一つの問題があることに気づいた。

「あ、それでだな・・・金があつても家出人としてウチで扱われている限りは、親父から数日中に追い出されるか、警察に家出人として引き渡されるのがオチなんだが・・・」

未だ宮彦の父と母のカグヤに対する認識は「名無しの家出少女」である。

このままでは、それこそ宮彦の言つた通りになりかねない。

また泣き出しやしないだろうか、と宮彦は気を揉んでいたが、カグヤはそんな宮彦の様子とは対照的に、ずいぶんとはつきりと、当たり前のことだと言わんばかりに答えた。

「そんなの簡単じゃ」

「はい？」

簡単？　これが？　父にも母にも事実の真相を話せない、この状態でか？

なんと彼女の事を弁明するのだろうか？

親の居ない子ども？　金だけ取られて施設に連れて行かれるのがオチだ。

不法入国した外国人？　そもそも犯罪だ。大使館が警察に連れて行かれてお終いだろう。

それとも真実を正直に話す？　馬鹿を言え、信じてもらえるはずはない。俺はあのカプセルが落ちてくるのを見たが、親はそんなの見てない。論外だ。一番あり得ない。

ひとしきり考えたのち、パンク寸前の脳を痛めながら、宮彦は力グヤに尋ねた。

「なあ・・・その簡単な方法って何なんだ？」

「うん？　そこまで考えても分からんのか・・・まあ、良い。特別じゃぞ？」

そのカグヤの高飛車な物言いにかなかな怒りを覚えつつも、宮彦は「こくり」と頷く。

「そなたの父と母に、真実を告げれば良い」

わーお。一番の穴馬がまさかの的中。

「・・・ってアホか！？　どうやってアンタが月から落ちてきたって証明するんだよ！　俺はあのカプセルを見てるから良いが、親父たちにあんなの見せても信用してもらえるかどうか・・・」

「あんなの」とはカグヤの出したペン型映写機のことである。

「それは妾が説明するのではない」
？

妾・・・つまりカグヤは説明しない・・・という事は・・・

恐る恐る宮彦は自らを指さす、が、カグヤは首をふるふると横に振る。

「じゃあ・・・誰？」

「月の者じゃ。この腕輪の電波を受信して、妾と監視役の位置が離

れていることに気づいたら、直^{じき}に来るであろっ」

「そ、そうか・・・」

安堵しかけた宮彦だが、ここでまたある疑問が湧く。

「なあ、月から地球までつてどのくらいの時間がかかる？」

「うん？ 急ぎの用事でなければ二、三日といったところだが・・・
どうかしたのか？」

「それって、一々カプセルを地球に送り込んでたら、間に合わない
ことないか？ あと数日でアンタはウチから追い出されるのに・・・」

「

カグヤの話が本当なら、今から月がカグヤの電波を受け取ってカ
プセルを射出しても、まさかカグヤがあと数日で追い出されるとも
知らないので、監視役の乗ったカプセルの到着は二、三日後・・・
という事になる。

「アンタが追い出されるまでに、監視役のカプセルはこっちに辿り
つけるのか？」

「なんじゃ、斯^{かよう}様な事の心配をしておったのか・・・心配せんでも
新しい監視役は一ヶ月から来るわけではない」

月から・・・来ない？

どういつことが分からず悩む宮彦の思考を、チャイムの音が寸断
する。

「あ、はい。今行きます」

玄関の方に駆けていく宮彦に、カグヤも続く。

のぞき穴を覗いた先には、宮彦のよく見知った顔があつた。

「秋平^{しゅうへい}おじさんじゃないですか。お久しぶりです」

ドアを開けると、宮彦は会釈をして、叔父を家に招き入れる。

「いやはや、大きくなつたねえ、宮彦君。あれは・・・確か中学の
入学式に君のお父さんと一緒にお祝いに行つて以来だったかな」

「その節は、どうも・・・」

宮彦の目の前に居る、割腹の良いスーツ姿の中年の男は、稲^{いな}辺^{べし}秋^{ゆう}
平^{へい}。

宮彦の父の弟、つまり、宮彦の叔父にあたる。

昔は家が近い事もあってよく遊んだ貰っていたが、市役所勤めの秋平の仕事が忙しくなってくるのと、宮彦の学年が上がることに、会う機会はどんどん減って行っただ。

「ハハ、そう堅くならなくても良いんだよ、ここは君の家なんだから」

そう言いながら、髭をもつさりと蓄えた顔に、人懐っこい笑顔を浮かべる。

「なんじゃ、次の監視役はそなたか、秋平」

と、宮彦の後ろから、カグヤがひよこ顔を出す。

「おお、これはこれは、お久しゅうございます、姫」

「今は・・・姫ではない・・・」

主従のような挨拶をかわす二人に、宮彦は一人おいてけぼりをくらう。

「えと・・・二人は、知りあい？」

それと、なんか監視役とかいう単語が聞こえてきたが・・・

「知り合い・・・というかの・・・」

「君たち親子や、近しい友人にも秘密にしてきたが、数年前から、私は月の王家に仕えてきたんだよ」

ナンデスッテ？

身近な人の思わぬ告白に、宮彦は数瞬思考を停止させた。

【第三話】 災いの付き人（後書き）

なんだか二人称がおかしいので一話と二話を一部改正しました。

【第四話】災いの語る事

「さて・・・どこから話したらいいものかな」

宮彦から差し出された注ぎたての緑茶を「ありがとう」と受け取りながら、宮彦の目の前のソファに、秋平は腰を降ろす。

背の低いテーブルを挟んで、その丁度反対側にあたるソファに宮彦が腰を降ろすと、カグヤもその隣に、先の二人にならって腰を降ろす。

「おじさんが、なぜ月の都について知っているかです」

月の都、というか、月に人が住んでいることは、地球に住む人々は知らないはずだ。

「それについては、妾^{わらわ}から話すでしょう」

と、横からカグヤが割って入る。

「元々、古くの昔から月と地球との間には人や技術の交流があった。そなたが先に申しておった竹取物語などは、古くから地球に月の使節などが訪問していた事を示しておる」

「うん？ 竹取物語に出てくるかぐや姫って、アンタと同じように罪を犯して地球に送られたんじゃないのか？」

宮彦がその場で浮かんだ疑問を口にする。

確かに、竹取物語のなかでは、かぐや姫はカグヤと同じく、罪人として地球に送られたと記してある。

「史実はそれとは異なる。当時、月の都では無能な指導者による度重なる失策により内政不安定が発生、月の重要人物でもあったかぐや姫は、月の中での混乱を避けるために使節団に参加するという名目で地球へと逃亡・・・また、その数年後に混乱の終結とともに多くの罪人が送られたため、まあ、地球側としてはたまったものではなかったらしいがの、かぐや姫の来訪とそれをあの物語の中では混同してしまったのじゃろうな」

カグヤが一気に話し終わると、宮彦はおっかなびっくりした顔で

頷く。
うなず

「な、なるほど・・・よくそんなスラスラ出てくるな」

「月の都では一般常識というやつじゃ」

そうは言うものの、少し得意げな様子のカグヤの話を引き継ぐ形で、秋平も話し始める。

「そして、今現在も月と地球のつながりは薄くはなつても絶えることは無く、交流を続けるためには、地球の側にも最低限月の都の事を知る人間が必要となった・・・ということだよ。まあ、私などはその中でも末端にすぎんがね」

最後は半ば自嘲的な口調で呟くと、「所詮一介の市役所職員だからね」と苦笑しながら付け足す。

「えと、それでなんですが・・・」

宮彦はまた新しい話題を切り出すために、言葉を発する。

「ん？ 何かな？」

「いえ、どちらかと言うところこちらの方が本題なんですけど・・・おじさんの口から、ウチの両親の方にカグヤの事、説明して頂けませんか・・・？」

息子の口から伝えるより、増してや、昨日転がり込んできた住所不定無職の家出少女の口から伝えるより、目の前の叔父の口から伝えた方が、父も母も信用しやすいだろう。

「ああ、そうそう、そのことだよ・・・いや、最近老けたかな、妙に物覚えが悪くてね・・・そのために来たという事をすっかり忘れていたよ」

秋平は先ほどの自嘲的な口調とは打って変わったおどけた口調で話す。

宮彦が切り出したとき一瞬キョトンとした顔をしていた辺りから、本当に忘れかけていたのだろう。

「それについては勿論協力を惜しまないつもりだよ。ただ・・・ただ・・・？」

「・・・何ですか？」

「いやね・・・このことを知るという事は、同時に月の都や彼女に関する守秘義務も生じてしまう。兄さんや義姉さんねえに関しては問題ないと思うが、君の方は・・・」

問題ない？ あ之母が？

宮彦は一瞬そんな事を口走りそうだったが、すんでのところで押しとどめた。

生真面目な父はともかく、問題はなんたっておしゃべり好きのあ之母だ。

とてもではないが秘密といったものを守れそうな人間ではない。言うなれば、彼女ほど「守秘義務」という言葉と縁が無い人間はない。

宮彦の祖母にきつく口止めされていた亡くなった祖父の生前の秘密だって、通夜つやの席で大声で喋ってしまったのだ（宮彦は通夜に出席しなかったためその内容を知らないのだが）。

不安そうにする宮彦を察してか、秋平は自らの義姉のフォローを始める。

「大丈夫だよ。ああ見えて義姉さんはしっかりしてるし、やる時にはやる人だ。喋るべき事と喋るべきでない事の区別ぐらいは付いているさ」

通夜の席で故人の秘密を大声で周りに知らせることが、喋るべき事と喋るべきでない事の区別についている大人のすることだろうか・・・？

「それよりも宮彦君、君は大丈夫かね？ 彼女や、月の都に関する事を、口外しないと誓えるね？」

「大丈夫ですよ。念を押すなら母にもっと念を押しとして下さい」
宮彦のまぎれもない本心だった。

あそこまで秘密を守れない母よりも秘密を守るといふその事において、信用性を疑われる日がこようとは・・・宮彦はこの日まで思いもよらなかった。

「ふむ、それならば良い。疑って悪かったね」

「いえ、構いませんよ」

「少しへこみました」が、と心の中で宮彦が付け足すと同時に、秋平は「よつこらせ」と立ち上がる。

「じゃあ、また夜遅く・・・十二時くらいにお邪魔するよ」

「え、もう帰るんですか？ それに夜遅くって・・・」

いきなり帰ると言い出した秋平にも驚くが、夜遅くとは？

また来るなら、別に父と母の帰ってきているであろう七時くらいでいいものを・・・

「あれ、聞いていないのかい？ 兄さんは今日大事な会議があるとかで遅くなってしまうってこないだ飲んだ時に愚痴ってたし、義姉さんも今日は夜遅くまで帰らないから昼食と夕食を差し入れてくれるって・・・」

そう言うのと、持っていた大きな方の鞆の中から「コイツも忘れるとこだった」と言いながら、白い鍋を取りだす。

「久しぶりに宮彦君に料理を作ると聞いたなら、豊子も張り切りすぎでね。ここ数日は余りすぎたシチューが晩飯ばんめしになりそうだよ」

豊子というのは、秋平の妻・・・つまり、宮彦の叔母にあたる。

「じゃあ、私も仕事があるし、帰らせてもらうよ。じゃ、またね・・・おっと、もうこんな時間か！」

「あ、ちよつと!？」

シチューの入った鍋を宮彦に手渡すと、秋平は足早に玄関から出ていこうとする。

「兄さんによろしくな」

そう言い残すと、秋平は玄関のドアの向こうに姿を消す。

「ちよ・・・ちよつとお・・・」

後には、シチュー鍋を抱えた宮彦。

「ふむ、という事は夜遅くまで妾とそなた二人つきり・・・ということか」

と言いながら、カグヤは「フフ・・・」と、どこか妖しいモノを含んだ笑みを宮彦に投げかけてくる。

俺は、果たして夜まで無事に居られるだろうか・・・
宮彦は、心の中で祈るしかなかった。

【第五話】災いの過去

クーラーの備え付けられた居間。

秋平の持ってきた昼食のシチューを平らげたのち、そこで讃岐宮彦は黙々と週末の宿題をこなしていた。

その傍らでアイス^{かたわ}をむさぼるカグヤは、テレビに映る映像を流し見ていた。

「のう？」

あの妖しい笑みを投げかけてきて以来、やはり自らも必要以上にそれを意識してしまい、今まではほ沈黙を守っていたカグヤがいきなり口を開いた事に驚く様子もなく、「うん？」と麦茶をすすりながら宮彦。

「テレビ・・・じゃったかの。その下に置いてある黒い機械はなんじゃ？」

カグヤの指さす方向を見ると、そこにあつたのは据え置き^ビゲーム機だ。

国内のみならず、海外でも普及している有名メーカーの物だ。長いこと使っていないため、上面に埃^{ほこり}が降り積もっている。

「テレビゲーム・・・ってやつだよ」

「てれびげーむ・・・とな？」

「ああ、仮想世界で戦ったり、車を運転したり・・・まあ、入れるソフトによっていろいろな遊びができる」

「へえ・・・面白そうじゃの」

と、キラキラと目を輝かせるカグヤ。

「・・・やってみるか？」

「うんうん」と頷きながら、「そうと決まれば、早^はう準備せい」とカグヤ。

「はいはい」と返事しながら、「ホントは宿題あるんだけど・・・まあ、いいか」と心の中で宮彦。

すぐにも出来るようにコードを裏からあらかじめ通した状態でしたため、すぐに準備することが出来た。

「さて・・・まあ、最初だし、レーシングゲームでいいか・・・」
「何じゃそれは？」

「車を運転するゲームって言ったらわかりやすいかな」
「ほう・・・お、映った！」

真っ黒な画面にゲーム会社のロゴが映り、タイトル画面へと切り替わる。

宮彦はとりあえず適当な車を選び、簡単なコースで練習させることにする。

「で・・・どうすればいいのじゃ？」

「ああ、まずコントローラーを握って」

そう言って、宮彦はカグヤにコントローラーを握らせる。

「ほう」

「で、×のボタンで前進」

「おおおおお・・・」

カグヤがボタンを押すと、ゆっくりと車が動き出す。

「で、のボタンでブレーキ・・・つまり停止」

「おおう！？」

画面の車が、コースの上で急停止する。

「でもって、左のスティックを倒した方向に車が曲がる」

「すていつく？棒なぞないぞ？」

「これだこれ」

宮彦が自分の方のコントローラーで示してやると、「これか！」とカグヤ。

しかし時すで遅し、画面上の車は、壁に正面から衝突していた。
「のわあ！？」

車を曲げようとするたびに、カグヤは体ごとカーブの方向に傾けるが、そんな事で画面の中の車は曲がらない。

「あーあ・・・いいか、ブレーキかけながら曲がる・・・つまり、

曲がるところに差し掛かったところで×を離すして、
曲がるんだ」

「な、何じゃと……？ うお！またぶつかった！」

「あーだからな……」

そうしながら、時間は急速に流れていく。

宿題を忘れるほどに、宮彦もカグヤに「教える」作業に没頭して
いた。

カグヤがようやくまともに走れるころには、すでに時計の針は八
時を回っていた。

「なあ」

「うん？ なんじゃ？」

まともに走れるようになったものの、カグヤは未だに体をコーナ
ーの方向に傾ける癖は直っていないらしく、その様子は横から見て
いて非常に微笑ましい。

「あんたつてさあ……向こうでこんなことはしたこと無かったの
か？」

「……妾わらわはな」

カグヤは、静かに話し始めた。

「妾は、月では遊んだ記憶はほとんどない……いつもいつも、父
君の跡を継ぐための、勉強のし通しであった」

「父君には妾しか子はおらんかったし、兄弟もおらんかったしの」
と付け足す。

宮彦は、少なからず驚いていた。

少し……いや、大分ワガママなところのあるカグヤのことだか
ら、てつきり両親に甘やかされてきたものだと思っていたが……
「遊んだ記憶どころか、月には一人の友人すらも居ない……秋平
に一時期預けられていた時にも、一人で遊んだ記憶しかない……
いや」

と、カグヤは何かを思い出したかのように否定の言葉を紡ぐ。

「一人だけ、いた……そう、地球に、一人だけの友が……ヤツ

は、今頃何をしておるかの・・・忘れておろうな、妾のことなど」
左右に体を揺らしながら、カグヤは自らの過去を吐露する。

「あの、約束も・・・」

そう呟いた時、車が大きなカーブに差し掛かり、同時にカグヤの体も大きく傾く。

「お・・・？ お、お、お、おおう！？ きゃあ！」

「の、のわあ！？」

「どさあ」という音と共に、二人はソファから転げ落ちる。

「あ痛^{いた}たた・・・おい、転^{いた}げるにしても派手すぎ・・・」

宮彦の抗議は、そこで中断する。

目の前には、カグヤの造形の整った、小さ目の卵型の顔。

黒髪^{くろみ}の匂^{にお}いが鼻孔^{きよく}をくすぐる。

丁度カグヤが宮彦を押し倒したようにも見える。

気まずい静寂・・・と、それを打ち破るように明朗な声が聞こえてくる。

「たっだいまー！」

「あ、ヤバ・・・母さんだ！」

「は、は、早う退^のけい！ このような場面を見られたら・・・」

「馬鹿！ アンタが退^のかなきゃ俺も動けないだろうが！」

「そ、そうじゃったな・・・ってきゃあ！」

「ちょ、おま・・・あぶろお！？」

立ち上がろうとしたカグヤがこぼれた麦茶で足を滑らし、丁度宮彦の胸に飛び込む形となる。

多少位置は変わったが、状況は一切好転してない。

それどころか、密着度は先ほどより高い。

「おお、これはこれで・・・じゃなくて！ 早くどかないと母さんが・・・」

「あらあら、えらく賑^{にぎ}や・・・」

途中で言葉を中断し、そのまま思考までも中断する宮彦の母。

『・・・あ』

と、宮彦とカゲヤ。

その後、彼らが宮彦の母の誤解を解くのに想像を絶する時間がかけたのは、言うまでもない。

幕間、その一

「ん．．．うん．．．」

結局の所。

「．．．寝付けないな」

カグヤは宮彦の家で引き取るという事で全ての決着がついた。

「昨日は疲れていて特に気にも止めなかったんだけど．．．」

いくら他に部屋の無い小狭い一戸建てとはいえ、やはり、年頃の少女と同じ部屋に寝泊まりするというのは、精神健康上良くない。

窓から差し込む月明かりに照らされるカグヤの寝顔を盗み見ながら、宮彦はそう思うのだ。

あんな事があった後では、なおさらである。

「あんだけニアミスしといて．．．よくその相手と同じ部屋でこれだけスースー寝れるな．．．コイツは」

いや、若しくは自分が意識しすぎているのか．．．

再び天井に視線を移すと、宮彦は今日の出来事を思い返す

カグヤが月から来たと聞いた時の、父の顔は無かった。

長年務めた会社が倒産したと聞こうが、地震が起きて未だにローンを払い続けているマイホームが倒壊しようが、あのように口をあんぐり開き、目の飛び出した父の顔は、見る事が出来まい。

もともとそういった物を真っ向から否定していた父だ。狼狽する
ものも分かる。

母は、そんなに慌てもしなかった。

ただ、「まあ」とニコニコしながら一言。

こないだ宮彦が扇風機をけつまづいて壊したときにも、全く同じ反応をしていた。

つまり、母にとって扇風機が壊れるのと月に人間が住んでいるのは、全くの同レベルの事象らしい。

まあ、それらは予想範囲内だ。

最も宮彦にとって予想範囲外なのは・・・

「コイツが学校に通うってことだよな・・・」

そう言っ、また隣のベッドで寝息をかく少女に視線を移す。秋平の話によると、どちらにせよカグヤがここに住んでいることは遅かれ早かれ露見するだろうが、学校にも行っていないと必要以上に怪しまれる。とのことである。

高校は自由意思で通うのだから別にかまわないと思うのだが、何よりカグヤ本人の希望するところであり、その意思をはねのける権利はこちら側にはない・・・はずなのだが、カグヤが罪人であるこの場合、その辺りはどうなるのだろう、と宮彦は思うのである。そして、カグヤは通える事なら宮彦と同じ学校に通いたいそう。確かに、見ず知らずの土地に放りだされたのだから、一人でも身近に知っている人間が多い方が心強いというものだ。

秋平の言うところでは、月曜日にでも転入試験を行うそう。ずいぶんと思っ、これも「暇は少しでも少ない方がいい」というカグヤの意思らしい。

まあ、確かに学校とは良いところだ。

勉強には辟易へきえきすることも多いが、学校とは勉学の場合でもあれば、月並みではあるが友人を作るための場でもある。

これまでロクな友人の居なかったカグヤには、良い刺激になるかもしれない。

そう、友人と言えば・・・

「アイツの言っていた・・・『唯一の友人』・・・か」

その後と言っていた「あの約束」とやらも気になる。

カグヤがその単語を口にしたとき、宮彦の脳裏で何かが「カチリ」と音を立てて動いたのだ。

気のせいではない。これだけは確証を持って言える。

この違和感・・・いや、不快感とでも言うのだろうか。

これは一体何なのだろうか。

考えれば考えるほど、訳が分からなくなる。

不可思議な気持ちを無理矢理抑え込むため、宮彦は布団を頭で被って、眠りに着くことにした。

明日、間仕切り買おう・・・

急速に眠りに落ちていく意識の中、宮彦はそう心の中で誓うのだ
った・・・

【第六話】災いと学校

「よう、おはよう・・・ってどうしたんだ？　なんか凄く疲れてないか？」

「ああ・・・そうかなあ・・・」

朝の自転車置き場。

旧友　もとい、悪友　である藤原一二三ふじわらひみつみが駆け寄ってきて、宮彦の隣に並んで歩く。

そう見えるのも無理はない。

間仕切りを買いにホームセンターに行ったは良いが、やはりそこでもカグヤに振り回され、結局昨日は間仕切りを設置したらそのまま疲れて寝てしまったのだ。

もはや彼女は宮彦にとつて災いに他ならない。

長年閉じ込められてきた反動でああなっているのだろうが、少しは分別というものを持ってほしい。

「はあ・・・」

そう心の中で愚痴りながら、また溜息。

「ああ、そうだ、聞いたかよ」

「何を？」

一二三との他愛のない会話でも、カグヤのことから少しでも離れられるならこれ以上ありがたいことはない。

が・・・

「新しく転入生が来るらしいぜ。まあ、まだ転入試験も終わってないらしいがな」

！？

「そ・・・そうなのか」

極力驚きを表面に出さないよう宮彦は細心の注意を払う。

またアイツの話か・・・

思わずズツこけそうになったが、あえて踏ん張る。

というか、なんでコイツは一昨日決まったその事を既に知っているのだろうか。

高校生の情報網、恐るべし。

「でな、朝練に来てた先輩が先生の話を盗み聞きしたらしいが、どうやら女子らしいぜ・・・まあ、女子って言っても皆が皆可愛い訳じゃないし、必要以上の期待は禁物かもなー」

「あ、ああ、そうね・・・」

残念、いや、この場合はおめでとうといった方がいいか・・・？
少なくとも宮彦の見る限り、カグヤの容貌ようほうといったものは決して悪くはないと思う。

顔だって小さめだし、目も大きい方だと思う。

顔の造形の一つ一つは、それぞれが主張しすぎることなく、実にバランスの取れた顔だちをしている。

やはり盗み見し過ぎた、と今更ながら思う。

これではまるで変態だ、ウン。

「お、おい・・・今度はなんて顔してんだ？」

複雑な顔で少々複雑な思考をしていると、一二三が声をかけてくる。

「あ、ああ、そ、そんなにひどい顔してた？」

「少し・・・な」

「まあ、お前のツラよりはまだマシだろ？」

「へっ、言ったな？ 百人切りの一二三様にかなうと思っているのか？」

「“切られ”の間違いじゃないのか？」

そんな軽口と笑いを交わしながら、二人は教室の扉の向こうへと姿を消す。

「ちゝかゝれゝたゝ．．．ゲフツ．．．」

「何が『ちかれた』だ．．．」

机と同化現象を起こしている一二三に肘鉄ひじてつを喰らわせると、帰路に就くため鞆を持ち上げ、教室を出て行こうとする、と．．．

「あ、讃岐君、探してたとこなんだけど．．．」

教室のガタの来ている扉を苦勞して開けながら現れたのは、石川いしか雅子わまさこ、彼らのクラスの学級委員長だ。

「先生が、裏門まで来てくれって．．．そのまま帰れるように、荷物も持つて行けだつて」

「裏門に．．．？ わかった、ありがとう」

雅子に礼を言つと、「何の用だろつか」という疑問を抱きつつも、階下へと続く階段へと宮彦は向かう事にした。

「あ．．．あれは．．．」

自転車を押しながら裏門に辿り着くと、そこに居たのはこの三日間で見いつきり見飽きた腰まで届く長い黒髪。

カグヤだ、アレはまぎれもなくカグヤだ。

いつもの着物ではなく、この学校の制服を着てはいるものの、間違いない。

「ん？ おお、ようやく来おつた．．．」

こちらの存在に気づいたのか、「おい」と呼びかけてくる。

隣には担任教諭。

うあ．．．逃げようと思ったがこれでは逃げられない。

おまけに何故か分からないが周りの視線が痛い！ 何故だ？

そのまま自転車で逃げようと思っていたが、宮彦は仕方なく二人の居る方へと向かう事にする。

「あの、なんでしょうか．．．」

そう言いながら教諭に駆け寄ると、教諭は申し訳なさそうに頬を掻きながら、こう切り出した。

「いやーそれがだね・・・彼女、帰り道を忘れてしまったらしくてね・・・」

帰り道を・・・忘れた？

「アンタ・・・来るときどうやって来たんだ？」

帰れないという事は当然来る事も出来まい。

「秋平に連れて来てもらったのじゃが、あやつは忙しくて途中で帰らねばならなくて。仕方なくお主を呼び出したのじゃ」

「・・・と、言う事で、彼女を家まで連れ帰ってくれないかね？」

やはり申し訳なさそうな顔の担任教諭の問いに、宮彦は頷く以外の術を知らなかった。

帰り道。

宮彦は自転車を押しながら、カグヤと並んで歩く。

すれ違う人々は老若男女皆が振り向き、男は魅了されきつて蕩けた視線を、女は羨望の眼差しを送り、そして男は決まってその後、宮彦に針のような視線を突き刺すのだ。

い、痛い・・・

場所は図らずも商店街。

人通りだつて当然多いが、その分宮彦に突き刺さる針も多い。

もう、宮彦は自分がハリネズミになったかのような錯覚まで覚えていた。

体が、重みのないはずの針の重みで鉛のように重い。

「どうしたのじゃ・・・？」

「いや、なんでもない・・・なんでもないさ」

そんな宮彦の様子に疑問を感じたのか、カグヤが声をかけてくる。
「そう言えばさ・・・」

「うん・・・？」

宮彦の問いに、カグヤは首をかしげる。

「何で転入試験の結果も出てないのに制服買ってるんだ？」

転入試験の結果が出るのは、恐らくあと少なくとも一週間はかかるだろう。

もし落ちていたら、どうするつもりなのだろうか・・・？

「フン、妾^{わいわ}が落ちるハズが無かるう」

さも当たり前のことだと言わんばかりに胸を張る。

確かに、王位を継ぐためにこれまでロクに遊びもせず、勉強漬けだったのに、地球の高校の転入試験ごときで落ちていては、何をしているのか分からない。

まあ、もし落ちていたら、盛大に笑ってやろう。

そんな宮彦の邪気を感じ取ったのか、カグヤはトゲのある声で問う。

「よもや、妾^{わいわ}が落ちるのを願ってある・・・などという事はなかるうの・・・うん？」

「そ、そんな事はないだろ？ ははははは・・・」

最後の方顔が引きつっていたのを見られた気がするが、カグヤはそれ以上そのことには何も聞かなかった。

「まあ、いい・・・それよりも、この制服、似合っておるか？」

白のシャツに、チェックのスカート。

着慣れていないもの故に、多少きこちない感じはするが、似合っている、と思う事が出来た。

が・・・

「似合っていない・・・」

ここでほめれば、また更にこの元姫様はつけあがる気がしてならない。

「な・・・なんじゃとう！？」

「似合っていないって言ったの・・・」

「む、むう・・・そなたの目は節穴か、この見る目の無い男め！」

「はいはい、何でも・・・」

「そ、そなたは・・・」

宮彦は何やらギヤーギヤーうるさいカグヤを適当にあしらいながら家へと帰る。

途中、さらに針が鋭くなったのは、この際気のせいだと思う事にした。

【第六話】災いと学校（後書き）

二日を語るのに間幕入れて六部分も使うなんて・・・OTL
精進せねば・・・

【第七話】災いは人気者

「うゝあゝ・・・ゲボラッ！」

「何が『うゝあゝ』だ・・・」

登校してきた一二三に肘鉄を喰らいながら、宮彦は一時間目の授業開始前早々、机と同化減少を引き起こしていた。

あの転入試験の日、カグヤと共に帰宅する場面をクラスメイトに目撃された宮彦は、しばらくの間質問攻めにあっていた。

そしてついに一週間が過ぎ、昨日、カグヤ当てに来た合否通知書その内容は・・・

「受かってたんだよね・・・」

「いや、何が？」

そう、見事に受かっていた。

まあ、クラスまで一緒になるとは限らないが・・・

「ああ、そうそう、受かったと言えば、例の転入生・・・まあ、お前は知ってるかも知れないが、無事受かったってよ」

「へ・・・」

一応、彼らの間では、カグヤは宮彦の遠い親戚に当たる・・・という事で決着がついていた。

「で、聞いた話だとウチのクラスに来るって・・・」

うあ・・・

最悪だ。

これ以上ないぐらい最悪だ。

家のみならず学校でもあのワガママ（元）お姫様に振り回される運命にあるのか・・・

このままじゃいつか胃に穴が空きかねないと宮彦は心中で愚痴りながら、ふと隣の席を見る。

授業時間数分前だというのに、未だに空の席。
数日前までは、この席にもキッチンと主が居た。

そう、数日前までは・・・

「友里さん、東京に引越したって？」

「そう、親父さんの仕事の関係とかでな」

宮彦は、数日前までその席の主であつた女子の名前を出す。

主を失つた机が次に主を得るとすれば、当然カグヤだ。

担任教諭にも当然カグヤと宮彦の関係はある程度伝わっているだろうし、顔見知りに近い方がやりやすいと思うだろう。

どうやら、自分はそのワガママ娘の面倒を、しばらく見ねばならないようだ。

「おい、席着けー」

ざわついていた教室の空気を、担任の良く響く声が貫く。

その後ろから、カグヤが続いて教室に入ってくるのも見えた。

「安形美千代と申します。あがたまちよ皆様、どうかお見しり置きを・・・」

そう言いながら優雅に、かつ恭しく一礼する少女。つつや

「おおおおお」と興奮しながらざわめく男子。

それに対し、非常に冷静に、しかし、確かに新たな人物の参入に、期待膨らませている女子。

その両者のあらゆる視線の対象になっている少女の腰まで届く長い黒髪は、間違いなくカグヤのそれだ。

が・・・しかし。

何か・・・何かが違う・・・

普段の高飛車な態度はナリを潜め、あのおかしな古臭い口調も全く見られない。

一体何があつたのだろうか・・・

宮彦がそんな事を案じていると、担任教諭が「じゃあ、讃岐の隣の席に行ってくれ」とカグヤに命じ、カグヤも「はい」と応諾する。そうして宮彦の隣の席にやたらと気品を感じさせる動作で座ると、

「よろしくお願ひしますね、宮彦さん」と笑顔で挨拶あいさつしてくる。
宮彦は「お、おう・・・」と、曖昧あいまいな返事を返すと、「ホントに
一体何があつたんだ!？」と心の中で叫ぶ他なかった。

昼休み。

休み時間ではとてもではないが時間が足りないため、ずっと我慢
の子を続けてきたクラスメイトが、一斉にカグヤの元に押し寄せて
くる。

「ねえねえ、安形さんって、讃岐君と同じ家に住んでるって本当？」
と、クラスの女子。

「ええ、本当ですわ」

と、カグヤ 否、安形美千代。

「じゃあ、さ・・・讃岐とはどんな関係なんだ？」
と、一人の男子。

「それは・・・もう・・・」

待てえい!

何故そこで頬を赤らめる!?

そう叫びたい衝動に駆られる宮彦。

「くう・・・惚れたあの子は他人の女・・・ってか・・・チクシ
ヨオー!!」

「かあ・・・羨ましいやましいぜ宮彦オ・・・」

そう言いながら、涙と宮彦への敵意の視線を垂れ流す男子勢。

「ま、待て、落ち付け落ち付け・・・」

その隙にも、女子の質問攻めは続く。

「ねえ、好きな食べ物は?」「讃岐君のどこが気に入ったの?」「
前の学校ってどんなところ?」「A・B・Cで言えばどこまで行った
?」

「ああ、ズルいぞ!」と、男子一同。

「好みのタイプってどんなの?」「やっぱり讃岐みたいなのか?」「
なあなあ、こんなのよりも俺と・・・」

ああ、もう・・・何で学生って言うやつは色恋沙汰をこつも好む
のだろうか。

何か不条理なものを感じつつ、宮彦は、これ以上カグヤが余計な
事を言わないよう、彼らから引き離すことにした。

「カグ・・・じゃなかった、安形さん、校内を案内してあげるよ」
人を掻き分けてカグヤの手を取ると、無理やり生徒の群れから引
きずり出した。

「汚ねえぞー!」「そうやって安形さんを独り占めかコノヤロー」
後ろから聞こえてくる罵声は、あえて無視する事とした。

数分後、二人は校舎の屋上に居た。

「ここなら追いかけては来ないだろうな・・・さて・・・」

と、宮彦は安形美千代と名乗る少女の方を振り向く。

「なんだよありや、何であんなお嬢様みたいになつてんの? それ
に安形美千代って誰?」

「フム・・・このままでは色々と弊害^{へいがい}が発生しかねんからの・・・
それにまさか本名を名乗るわけにはいくまい、安形とはこちらで世
話になった者の名じゃ」

少し慣れていない口調に幾許^{いくばく}か気を使っていたらしく、フツ・・・
と表情を幾分か緩ませると、いつもの口調・態度のカグヤに戻る。

やはり、別人と言う訳ではなかったらしい。

ただ単に猫をかぶっていた・・・ということか。

「大体、何で俺とアンタが付き合ってる事になつてんだよ?」

「妾^{わらわ}は一言もそんな事は言っておらん・・・あの者たちが勝手に勘
違いを起こしただけじゃ」

確かに、カグヤは一言も「付き合っている」などとは口にしてい

ない。

しかし、先の態度は誤解を招くには十分すぎるほどの威力を持っていた。

「もつと言いつてもんがあるだろ・・・まあ、アンタの事だからわざとだろうがな」

「まあ、な」

と、悪戯っぽく微笑むカグヤ。

本人にとっては軽い冗談のつもりなのだろうが、宮彦としてはたまったものではない。

しばらく、教室でもあの針のような視線で刺され続けることになるのだ。

「はあ・・・」と、これから起こり得るであろう労苦を思い浮かべながら溜息をつくとき、カグヤに二つ、ビニールの包みを手渡す。

「これは・・・なんじゃ？ 細長いパンのようじゃが・・・」

「昼飯だよ、昼飯。まさかあそこで食べるわけにもいかないだろう？」
あの混沌とした教室という名の戦場で、カグヤが昼食を食べるのは至難の業わざだろう。

入った瞬間、男子、女子両軍に昼休み終了まで取り囲まれ、ジ・エンドだ。

「確かに・・・では、頂くとするかの」

カグヤはそう言うと、段差に腰掛けながら透明なビニールの包みを破って、中のパンを半分包みに隠したまま頬張る。

その横に宮彦も座り、同じようにパンを頬張る。

「たまには、このようなところで食べるのもいいものじゃな」

カグヤが呟くと、宮彦も「ああ」と呟く。

青い大空を見上げると、彼らの頭上をまっ白な雲が緩やかに流れて行った。

【第八話】災いとライバル

とある平日の昼下がり。

昼食を終え、一二三やその他の友人数人と、他愛もない話をして
いると、急に教室の古びた引き戸が「ガタガタ」と耳障りな音を立
てながら、勢いよく・・・という訳ではないが、それなりの力を込
めた手で開けられた。

「失礼する」

と、四人の男子がずかずかと教室に入り込み、カグヤの席の辺り
にできた、机の島に向かう。

「ちよつと、いきなり女子の席取り囲んで・・・アンタら何者？」
カグヤ含め数人を取り囲む四人の男子の尋常ならざる雰囲気、
雅子が多少強めの口調で問う。

「いや、僕はただ単にこの三人に連れてこられただけで・・・」と、
子犬を思わせる小柄な少年。

堂々としている他の三人に比べ、申し訳なさそうな表情を終始浮
かべている。

「ちよつと、そこに居る安形君に用がありまして・・・まあ、僕も
この二人に無理やり連れてこられたんですが」眼鏡をかけた物腰の
柔らかい、見るからに優しそうな少年がカグヤの名前を出す。

立っているだけで、その端々から知性が滲み出ている・・・俗に
言うインテリとか言うやつだ。

「何言つてんだ、お前だつて気になるって言つてたじゃないか」野
性味溢れる色黒の少年が物腰の柔らかい少年に突っかかる。

そういえば、宮彦は放課後グラウンドで何かの運動に興じる彼を
見た覚えがあった。

「まあまあ、そう言うなって・・・あとは、その娘の彼氏なんだが・
・・」四人の中でもリーダー格と思しき少年が、二人の間に割って
入る。

と、その時、厄介事の空気を感じ、コッソリ教室を出て行こうとしていた宮彦の姿が、彼の目に映る。

あ、ヤバイ……と感じた時には時すで遅し。

「君が讃岐君か……初めまして、磯野守人だ。よろしく」

「がつし」と力強く握られた手に、宮彦は「ど、どうも……」と返すしか無かった。

「さて……」

と、磯野と名乗った少年が切り出す。

「まずは軽く自己紹介と行こうか」

丸く円のように並べられた机には、守人を含めた少年四人と、安形美千代ことカグヤと、宮彦……そして、何故か一二三がそれぞれ座っていた。

まずはじめに自己紹介を始めたのは、磯野だった。

「さっき讃岐君には言ったが、俺は磯野守人、よろしく」

その次は時計回りに、子犬みたいな少年。

「えと……島……治律です……よ、よろしくお願いします」

さらに、メガネのインテリが、恭しくお辞儀をする。

「大友三之です。まあ、他人からはよく『女みtain名前』って言われますが、よろしくお願いします」

そして、色黒の彼が、名乗りを上げた。

「阿部藤二康……まあ、よろしく頼むぜ」

そして一二三、カグヤ、宮彦の順で自己紹介が一通り終わると、磯野が宮彦の方へと身を乗り出してくる。

「率直に言つが、僕たち四人は君の彼女の安形君を、狙っている……

・まあ、極端な表現だがね」

その言葉に、教室内が湧きたつ。

待て、ちょっと待て。

宮彦としてはまず彼らに「カグヤの彼女」と思われている点が既に想定範囲外である。

あの転入初日の一件から、そのような噂が立ったのだろう。

くそう、噂流した奴、見つけたらそいつの椅子にビッシリと隙間なく画鋏張り付けてやる・・・」

「で、正面切ってアンタらに会いに来たんだが・・・」

阿部が続けてそう言い、宮彦の顔をジッと凝視する。

「・・・まあ、素材は悪くねえ・・・磨けば二年の中でも十指、いや、五指に入るかもしれないねえ・・・が、こりやまだ俺たちに分があるな・・・って思ったわけよ」

そこで、宮彦は「ハア!？」という表情になる。

確かに四人の内の阿部を除いた残り三人。

こちらはまだ分かる。

島などは女性からすれば、いや、男性から見ても思わず撫でたくなるぐらい母性本能がすぐられる容姿をしているし、大友は立っているだけで知性のオーラに充ち溢れ、また、少し会話を聞いたただけだが、非常にとつきやすい性格もしている。

磯野も、ここから見ただけでも十二分に整った顔立ちをしており、何の変哲もない夏の制服であるワイシャツを、まるで広告のモデルのように見事に着こなしている。

この三人、確かにアイドルグループに居ても何らおかしくはない。だがしかし阿部はと言うと、伸びきってフケの湧いた髪ぶしやうひげの毛、伸ばすにしても手入れもせず放置しぱなっしの不精髭、毎日運動をしているにも関わらず、大きく洋ナシのように飛び出た腹に胴長短足。発汗量が多いせいか、不自然な場所に異様な量の汗の染みついたシャツを着る彼からは、カッコ良さどころか清潔感の欠片も感じる事が出来ない。

これならば、顔はまあ良いものの、やたら喋るために三枚目になっている一二三の方が数十倍マシといったところである。

「アンタ・・・ホントに自分がカッコイイって思ってる・・・?」

宮彦は恐る恐る聞く。

「フン、当たり前に決まってるだろ・・・少なくとも俺たち四人の中では、一番のイケメンだと思ってるぜ」

教室内の全員が、「それはない」と首を振る。

「コホン・・・本題に戻らせていただくが・・・」

磯野がもう一度話を立て直す。

「安形さん・・・君は我々の内の誰かと・・・付き合うつもりはないかな？」

その問いに、カグヤははっきりと答えた。

「お断りします・・・私には、既に心に決めた方がいらっしやいます」

「おおおおー！」と教室内のギャラリーが沸く。

待て、落ち付けお前ら、だから俺はコイツの彼女じゃ・・・

そう言おうとするが、ギャラリーは興奮しきって、既に手がつけられない。

「心に決めたお方だって・・・キャー！」「幸せ者だな、讃岐い！」と男子。

「一度でいいからあのセリフ・・・言ってみたいわあ・・・」「ロマンチックよね・・・」と、女子。

「・・・ですが」

と、周りの騒音を貫くかのようにカグヤの凜とした声が響き、ギャラリーのざわめきが収まる。

「もし、そこに居る彼・・・宮彦君より私を貴方がたが想ってくれているかという事を証明してくだされば、そのお方を私は選びますよう」

「本当・・・なのかい？」

「ええ、神に誓って・・・」

磯野含め、四人は少し驚いたような顔になる。

宮彦にとっては「誰でもいいから早くコイツを持って行ってくれ」というのが本音であったが。

「ですが、証明すると言つてもどうやって・・・？」

大友が素直な疑問を口にする、カグヤはそれに答える。

「それぞれ一人一人に私が『難題』を出します。それを達成する事が出来れば、貴方がたの想いを認めてあげましょう」

「なあなあ、それって俺も参加して・・・いいの？」

と、一一三。

「構いませんよ」

とカグヤ。

一一三はその答えに、「オッシャアー！」と大きくガッツポーズをする。

おいおい、まだお前は難題を達成してないだろ、と宮彦は心中でツッコむ。

まあ、今回は高見の見物を決め込むか・・・と宮彦が思ったその時。

「そして、その難題は宮彦君にも解いて頂きます」
！？

「よろしいですね、宮彦君」

そう言ったカグヤの天使の微笑みが、宮彦には明王が咎人^{とがひと}を前に不気味に微笑むかのように見えた。

【第九話】災いの難題

「はあ……」

と、自室の簡素な椅子の上であぐらを掻きながら、宮彦は深い溜息を吐く。

すると、カグヤが間仕切りから「ひよこ」と顔を出してくる。

「どうしたのじゃ一体……そなたにウジウジされるとこちらまで気分が重くなるではないか」

「てことは何か？ 俺が溜息吐きまくったら、アンタはどんどんどんどんナメクジが塩かけられて縮むみたいに衰弱していくのか？」

「できるものなら」と、不敵に笑うカグヤ。

「というか、俺の今の悩みのタネを作ったのは、アンタなんだぞ？」

宮彦が「びしっ！」という擬音の響きそうなくらい力強くカグヤを指さすと、当の本人は頭に「？」を浮かべたような顔になる。

「妾^{わいわ}が何をしたのじゃ？」

「何って……あの四人を噓^{けしか}けるとこまでは良かったが、何で俺までその難題とやらをやらされなければならないんだ？ しかもこれで完全に俺はアンタの彼氏って認識されちゃった」

今回、難題の話が出た時に、宮彦は自分は参加せずに楽できるものだと高を括っていた。

だがしかし、何故か宮彦にもカグヤは難題を出すと言い出した。

その上、公衆の面前で「宮彦は私の彼氏です」とも取れる発言をし、完全に校内での「カグヤの彼氏」という宮彦の立場を確立してしまった。

「ふむ……しいて言えば……」

「しいて言えば……？」

「面白そうだからじゃ」

「はあ？」

面白そう？

「とりあえずそなたの苦しむ顔が見れば、楽しそうじゃしの」

このっ・・・ドS姫めっ・・・！

宮彦は諦めたように溜息をつく、質問を続ける。

「難題って言うからには、それなりに難しいんだろ？」

「まあ、それなりのモノは用意しているつもりじゃ。これを達成した者しか妾と付き合えんしの」

うん・・・？ これを達成した者しか・・・？

「てことはさ・・・もし他のヤツが全員失格になっても、俺が達成できなかったら、俺は彼役から降りられる・・・って事だよな」

達成する事が彼氏の条件であるならば、例え宮彦以外の全員が難題を達成する事ができなくても、宮彦が難題を達成しなければ、彼氏役は空白となるのではないだろうか。

「馬鹿を言え、そなたを除く全員が達成できなかった場合、そなたは達成できてもできずとも、今の立ち位置のままじゃ」

「てことは、どう転ぼうが誰かが難題を達成しない限り、ずっと俺がアンタの恋人扱いって事・・・？」

自らを指さしながら、宮彦は問う。

「そう言う事じゃ」

「なんでだよ・・・」

宮彦の疑問に、カグヤは「仕方ない」といった顔をして説明を始める。

「まず、見たとこそなたには恋人があらぬ」

余計なお世話だ。

が、間違っではないので宮彦は言い返せない。

「そして、妾は正体が露見するのを極力防ぐ必要がある」

そのためにわざわざ安形なんて偽名を使っているのだ。

月の事を知られないためにも、それは避けるべきである。

「そのためには、できるだけ妾の身近の人間は事情を知るものだけに限る必要がある。恋人ほど身近な人間ともなると、妾もボ口を出さない自信はない。まあ、これは言い寄られても妾が断り続けるこ

「とでも問題はない」

そして最後に、「とはいえ、言い寄られるのも面倒じゃしの」と付け加える。

「彼氏役がいれば言い寄られる可能性もないし、断る必要性も無い・・・か」

そのための彼氏役ということか。

「さて、明日のために難題作りに励むとするかの」

どこか不穏な笑みを見せながら、カグヤは間仕切りの向こうへと消えて行く。

「そうそう、もしそなたが失格となったら、クラスの全員にそなたに手箒^{てり}めにされたと言っからの」

なっ・・・

「お、おい、ちょっと待ってくれよ・・・おい！」

結局、その日は一度も答えが返ってくることはなかった。

翌日、放課後の中庭で一二三と落ち合つと、その後次々と四人が到着し、最後にカグヤが現れる。

「さて・・・ここに六つの封筒を用意しています」

カグヤは鞆の中から茶封筒を六つ取り出し、説明を始める。

「好きな封筒を早いもの順で選んでもらつて結構です。期限は明日から一週間。封筒を一度開けたら、私が失格とみなさない限り、棄権は認めません。それと、かなり危険なものも混ざっているので・・・まあ、せいぜいお気を付けになってください」

そう妖しい雰囲気でカグヤがそう告げると、皆が唾をのむ音が聞こえた気がした。

「あの僕・・・やっぱり棄権し・・・」

「あ、僕もついでに・・・」

「おゝいおい、ここまで来てそりゃあねえだろ？」

拒否の意思を示すため、両手を挙げかけた大友と島だったが、阿

部が「ガツシ」と二人の肩を掴み、制止する。

「ああ、それとですね、言い忘れてましたが宮彦君は最初から最後まで棄権はできません」

手を挙げかけた宮彦に、カグヤは追い打ちをかける。

命に関わるような目に遭うぐらいなら、まだあと一年と半年、学校中の人間から白い目で見られる方がマシだと思ったのだが……このドS姫（元）……いつか必ず家から放り出してやる……！ルールを確認すると、それぞれが封筒をカグヤの手から引いていく。

「そいやあ！」

と勢いよく封筒の口を引きちぎる阿部。

いや、普通に開けるよ……と突っ込みたくなるが、宮彦はとりあえず流すことにした。

「なにに……マンホール（大型）を五個、素手で持って来い……？」

あーあ……

宮彦はあらかじめカグヤから当たりとハズレがあるとは聞いていたが、これは間違いなくハズレだ。

「くそう……やってやるよ！」

そう言いながら、のしのしと去っていく阿部。

「さて、僕のは……え、と……校長のカツラを剥ぎ取ってくる……？」

「ああ、気づかれたらその時点で失格ですからね」

大友が開けた封筒の内容を、ニコニコしながら補足するカグヤ。彼らの学校の校長、大学時代にはラグビーサークルに入り、校長になるまで野球部の顧問をやっていたらしく、五十代後半にも関わらず、屈強な肉体をしている。

全盛期には、「暴れ竜」という良く分からないアダ名までついていたらしい。

が、肉体のトレーニングはできても頭皮のトレーニングは怠って

いたらしく、カツラをかぶってはいるものの、既にその下は焼け野原であるという事を、ほとんどの全校生徒・教職員が知っている。と、言う事は、すなわち死んでこいと言うようなものだ。

この少女、鬼である。

「まあ、そう落ち込まないで・・・僕のは・・・」
がつくりと膝をつく大友を慰めながら封筒を開けた島。

「え・・・紅龍関の茶碗を持ってこい・・・？」

紅龍関とは、現在相撲業界を賑^{にぎわ}せ、次の横綱とも目される存在である。

何のコネもない一般人では、いきなりそんな事を言っても、門前払いが関の山である。

「さーて、じゃ俺様は・・・え・・・？」

一二三が、封筒を開けるとともに硬直する。

宮彦が横から神を覗くと、外国のブランド名が紙一杯にビッシリ記されている。

「ああ、そのブランド名のバッグをすべて買って来てください」

宮彦の見たところ、どれも世界に名を馳せる有名メーカーであり、とてもではないが一つでも普通の高校生が手に入れることは、到底叶わないものだ。

ガックリとうなだれる一二三の肩に、宮彦はポンと手を置いた。

諦める・・・

「さて、残るは君と僕の封筒だけか・・・」

封筒を開けていないのは、宮彦と磯野だけとなった。

「二人同時に開けよう」

「・・・分かった」

そう言うと、二人は同時に封筒の口を破る。
すると・・・

「これは・・・」

「マジかよ・・・」

『一週間以内に一千万稼ぐこと・・・って、え!?!』

二人の声が、微妙なイントネーションまで重なる。

「君もかい？」

「まさかアンタも？」

紙を覗き込むと、二つの紙には、全く同じ難題が書かれていた。まさか、二人とも同じ難題とは・・・

全員が封筒を開けた事を確認すると、カグヤが声を上げる。

「さあ、皆さん難題は把握しましたね、では、今日は解散！」

カグヤの号令にも、未だ反応できない者がいた。

【第十話】災いの助け船

一千万・・・かぁ・・・

「はぁ・・・」

「よう、親友！　なんだか落ち込んでるねい！」

目標のハードルの高さに落ち込む宮彦とは対称的に、やたらとハイテンションな一二三が肩を力強く叩いてくる。

「と言うかお前はさぁ・・・何か難題に向けて努力しなくていいのかよ？　阿部だって学校休んでマンホールの蓋引きずってるって言しさ・・・まあ、つってもお前らは何も失わないから良いよなぁ・・・」

宮彦と一二三以外の四人は、難題に苦悩しながらも、思い思いの方法で取り組んでいた。

宮彦はどうすればいいのかわからず、手をこまねいているだけという状態であったが、一二三の場合努力はおろか苦悩すらしていないように見えた。

とはいえ、彼らの場合達成しなくてもペナルティは一切ない。

しかし宮彦は達成できなかった場合、カグヤの流言により、華の学生生活を滅茶苦茶にされる恐れがある。

一二三は既に難題を諦めたのかのように、宮彦の目には映つたのだ。

「フフ、甘いなぁ・・・こう見えても俺は難題達成のため努力は欠かしてないんだぜ？」

そう言う割には、宮彦の見える範囲では何の努力もしていないように見える。

宮彦が疑わしげな顔をしていると、一二三は近くにカグヤや、彼女に近い者が居ないことを確認すると、声のトーンを落としてことう言った。

「実はだな・・・俺はこの際家族の力を借りようと思う」

「家族の力・・・？ いや、でもお前の親父さん、自動車のディーラーだろ？ それに家族の手伝いはご法度だぞ？」

事実、彼の父親は自動車のディーラーをしているのみであり、ブランド品のバッグとの接点はないように見える。

そして、難題は全て自らの手で行う事が、カグヤによって各員に義務付けられていた。

「実はな、兄貴がブランド品のバッグを扱う仕事に就いていてな、その上、姉貴は皮革を扱う会社に勤めている」

「で・・・？ お前の兄さんに安く売ってもらうとか？」

その宮彦の考えに、ぶんぶんと首を振る一二三。

「まさか！ 兄貴の権限フルに使っても、ウチの全財産はたいったってこれだけの量、買えるわけがないだろう？」

そう言つて、小さな紙にビッシリと書かれたブランド会社の名前を指さす。

恐らく、一千万では三割も買えないであろう。

難題の中では、最も難しいものかも知れない。

「答えは単純・・・作るんだよ」

「はあ？ 作るう？」

コイツは、偽物を掴ませる気か？

「ああ、そうさ」

「バレやしないのか？」

カグヤにその事がバレた場合、当然失格は必至だろう。

「大丈夫大丈夫・・・それに、これまで家族ほぼ総出で徹夜で作業し続けてきたんだ。もう今更作るのを止めるって言うわけにもいかないよ。クラスの女子に無償で配る・・・って言っちゃったしさ。バレたらバレたで、運が悪かったって思うしかないさ」

成程、バレるのは覚悟の上・・・ということか。

だがしかし、宮彦にそんな事をする余裕はなかった。

なんとしても、本物の一千万を手に入れるしか、茨色地獄の学園生活を回避する方法はないのだ。

「つつてもなあゝ・・・」

床に敷いた布団に転がりながら、宮彦は頭を抱えた。

そこら辺に居る高校生が一週間程度で一千万稼ぐなど、到底不可能である。

同様の難題を出された磯野の方も遅々として進んでいないようだったが、こちらはなんてったって学園生活そのものが懸かっているのだ。

負けられるハズが、無いではないか。

「フム・・・どうやら悩んでおるようじゃの」

またしても「ひよこ」とカグヤが間仕切りから顔を出す。

「うつさい・・・ああ、どうすりやいいんだよ・・・」

頭を抱え続ける宮彦。

その時、カグヤはわざとらしく、大声でこう言った。

「もしかしたら明日・・・妾^{わらわ}は金を道端に落とすかも知れんのお・・・それを売れば、一千万は軽く稼げるじゃろうのう・・・」

！？

「今、アンタなんて・・・」

「ああ、今のは一人ごとじゃ、忘れてくれ・・・こちらに来てからどうも一人ごとの癖がついたようでの・・・」

「・・・助け船を出すつもりか？」

「ああ、勘違いをするでないぞ・・・すでに同様の事をほのめかす文^{ふみ}をそれぞれにも送っておる・・・まあ、阿部の方には何の助けにもならんじやろうかの」

確かに、あれを売って金にすれば一千万稼げるどころか、あの大きなブランド品をほとんど買えるだろう。

紅竜関の茶碗だって譲ってもらえるかも知れない。

校長だって、大金を渡されれば見て見ぬふりをしてくれるかも知れない。

マンホールは・・・まあ、確かにどうにもならないだろう。

「全員への助け船・・・ってか」

「さあ、の・・・何も知らぬ者が拾う可能性とて、否定は出来ぬからの・・・」

確かに、落とした金塊を何の関係もない人間が拾う可能性だってある。

要は、全て運次第・・・という事らしい。

「さて、明日のために今日は妾は早めに休むとするかの」と言つと、カグヤは間仕切りの向こうへ姿を消した。

【第十一話】災いを探して

「ピピピ」と、無機質な機械音が部屋に響き渡る。

「う……ん……」

宮彦はようやく慣れてきた床の上の布団の、妙に堅い感触を背中に感じながら身じろぎする。

「よいしょ……と」

折りたたみ式の携帯を開き、アラームを止める。

カーテンを開けると、昨日までの雨も止み、嘘のような快晴であった。

現在時刻は、六時。

そして、曜日は土曜日、つまりカグヤが「金塊を落とす」と宣言した日の翌日にあたり、もし彼女が約束通り動くなら、金塊は今日落とされることになる。

そのため、いつもこの曜日は遅くまで寝ている宮彦は、カグヤが彼が寝ている間に金塊を落とさないように、わざわざ早起きまでしたのだ。

「さて……アイツを起こさないようにしなきゃな……」

必要以上の音を出さないように着替えながら、宮彦は朝食を取るため階下へと下りていく。

実際、カグヤと同じ家に住んでいるというのは、かなりのアドバンテージである。

早い話、彼女の跡を尾けて行つて、その落とした瞬間を狙えば、確実に金塊を手に入れられる。

これは、阿部と宮彦を除いた他の四人には出来ない芸当である。と、一階に降りたところで、宮彦は早朝ランニングから丁度帰ってきた父親に出くわす。

「あ……おはよう、父さん」

「ああ、おはよう……それにしても、今日はえらく早起きだな」

趣味であり、メタボ対策でもある早朝ランニングに毎日汗を流している父とは違い、宮彦は休日はおるか平日もギリギリまで寝ている。

平日は常に七時くらいまで寝ている宮彦が、休日の六時に起きるのは、異例とも言える。

「アイツよりも早く起きなきゃいけない用事が出来てね・・・」
と、二階を指さすと、父は不思議そうな顔をする。

「アイツというのはカグヤさんの事・・・だよな」

「うん？ ああ、そのつもりだけど・・・」
いったいどうしたのだろうか？

宮彦も、父と同じで不思議そうな顔をする。

「彼女なら、私と一緒に五時くらいに出て行っただぞ？」

「・・・えっ!？」

宮彦は急に駆け出し、父の「お、おい!」という制止の声も聞かず、一目散に二階へと続く階段を駆け上り、部屋の真ん中の間仕切りを勢いよく開ける。

「・・・やられた」

ベッドの上は、もぬけのからであった。

恐らく、公平性を保つためであろう。

「ありがと、父さん・・・行ってきます!」

今度は猛烈な勢いで階段を駆け降りる息子に呆気にとられる父を尻目に、宮彦は玄関へと向かう。

「あ、ああ・・・最近ひつたくりが多いから気をつけろよ」

玄関から出る時に、そんな事を言われた気がした。

「さて・・・」

家を出てきたは良いものの、宮彦は玄関先で途方に暮れていた。まさか、カグヤがこれほど早く起きるとは誤算であった。

「どうしたもんかな・・・」

カグヤが行きそうなところと言っても、全く見当がつかない。

・・・いや、そうでもないか、と宮彦は思いなおす。

幸いカグヤはまだここに来てから日が浅い。

その上、これは一緒に登校している宮彦だから知り得た事なのだが、カグヤは極度の方向音痴である。

以前校舎内で迷子になって、宮彦が職員室まで放送で呼び出された事もあった。

そんな彼女が行くことのできるところと言えば、毎日通る通学路以外にない。

これは恐らく、宮彦以外は知りえない情報であろう。

情報を整理する事で、少し希望が湧いて来た宮彦は、ふと物陰からの視線が彼を注視していることに気づく。

宮彦とカグヤが同じ家に住んでいるのは周知の事実だが、宮彦の家を知っているのは、あの四人の中では唯一、一人。

「出てこいよ、一二三」

宮彦が声をかけると、電柱の陰から双眼鏡片手に、のそのそと一二三が姿を現す。

「やっぱりバレちまったか・・・お前も安形さんの跡を尾けるのか？」

その一二三の問いに「数秒前まではな」と答えると、一二三が不思議そうな顔をしたので、事の顛末を話そうとしたが、そこで宮彦は思いとどまる。

ここでカグヤがここにはいないことを一二三に話さなければ、彼は恐らくずっとここで讃岐家の玄関口を、見張り続けることである。

そう、目的の人物などとうに居ない家の、だ。

そうと決まればライバルは一人でも少ない方が良く。

高々友人一人と、俺の学園生活、どちらが果たして重かるうか。

そう決断すると、宮彦は「俺は正々堂々やることにするよ」と言

に残し、一二三をその場に置いて通学路へと向かう事にする。

「お、おう・・・」と答える一二三は、未だに双眼鏡を後生大事に抱えながら、讃岐家を観察していた。

通報されやしないだろうか・・・

そんな不安を覚えつつも、宮彦はとりあえず通学路をなぞる事にした。

「あゝ・・・」

結局の所。

「見付かんねえ・・・」

結局宮彦によるカグヤ及び金塊搜索は昼過ぎまで行われ、マンホールを引きずる阿部や、思い思いの場所を探す残り三人を見かけることはあつたが、それらしい物どころか、カグヤの姿すら見つけれなかった。

「既に誰か関係ない奴に拾われてる可能性だつてあるしな・・・」

「どう・・・」と紙パックのジュースをストローで啜^{すす}りながら、

宮彦は呟く。

いつカグヤが金塊を落としているか分からない以上、その可能性は十分あり得る。

もつとも、まだカグヤが金塊を持っている可能性だつて有り得る。いずれにせよ、今日一日は通学路を這いずりまわることになりそうだ。

休日一日を潰す程度、残りの高校生活全てをあのワガママ姫様に潰されるよりは万倍良い。

「よし、行くか！」

気合いを入れなおすと、宮彦は再び彼女と金塊の搜索に乗り出した。

「フフ・・・粘っておる粘っておる・・・」

ビルの二階にある小奇麗な喫茶店の窓際。

眼下で飲み物のパックをゴミ箱に投げ入れた青年を眺めながら、黒い長髪を持つ少女は悪戯っぽく微笑む。

「うん・・・？　どうかしたの？」

目の前のショートカットの少女に問われると、「ううん、なんでもありませんよ」と、にこやかに答えるカグヤ。

それにしても、よくここまで口調と表情をころころ変えられるものだ。

「それにしても、石川さん、こんな所でどうしたんですか？」

そうカグヤが問い返すと、雅子は手に持った鞆を示す。

丁度この喫茶店の前でバッタリ出会った二人は、少し話ついでにお茶をすることにしたのだ。

「図書館まで宿題やりね。美千代さんこそ、制服でどうしたの？」

その言葉が示すとおり、カグヤはいつもの制服姿。

それとは対照的に、雅子は灰色のキャミソールワンピースに、黒のカーディガンニットを羽織った私服姿だった。

「ああ、少し用事を頼まれていまして・・・それに、まだこれしか持っていないですよ」

と、制服を示すカグヤ。

まさか、目立つ和服姿で行動するわけにもいかないため、仕方なくいつもの制服姿で行動しているのだ。

「じゃあ、さ・・・これからちょっと付き合わない？」

人差し指を立てて提案する雅子に、カグヤはひたすら顔に「？」の文字を浮かべて居た。

「あの……」

「うん、やっぱどんな服も似合うね！」

数十分後、カグヤと雅子は先ほどの喫茶店の隣の洋裁店に居た。

「讃岐君にねだって買ってもらいなさいよ……彼氏には貢がせなきゃ損よ、損」

「はあ……」

入ってからずっと、カグヤは完全に雅子の着せ替え人形と化していた。

「よし、次はこれ着よ、これ！」

そう言つて、雅子はまた一着のシャツワンピースを手取る。

困った……まだ金を落としていないのに……

カグヤは、少々途方に暮れていた。

「はあ……」

そこからさらに数時間後。

「雅子め……人を玩具にしおつて……」

カグヤは何とかいつもの川沿いの通学路に復帰すると、重い足取りで讃岐家に向かう。

その服装は、白のシャツに、ベージュのフレアブラウス、青のスカートという、最初の制服姿とは全く違ったものになっていた。

結局あの後さんざん着せ替えられたあと、「代金は私が払うから……え、お代？ いいのいいの、私が好きでやったんだから」と言う雅子にさらに数着の洋服を押しつけられ、金塊を未だ置くことなく、カグヤはとぼとぼ道を歩いていった。

まあ、こういう服装も悪くは無いかもしれない。

アイツは、果たして「似合っている」と言ってくれるだろうか？

「……いや、それはないの」

一人で断言するカグヤ。

以前も制服姿を見せた時にそう聞いたら、仏頂面で「似合っていない」と答えた。

「・・・この朴念仁ぼくねんじんめ」

ここには居ない者を相手に、カグヤは悪態をつく。

「女子おなこに『似合うか』と聞かれたら『似合う』と言うのが礼儀というものじゃ」

頬を膨らませながら、カグヤは愚痴る。

そういえば・・・と、そこでふと思い出す。

以前この星に来た時も、似たような無礼な少年が居た。

そう、「似合うか」との問いに、「似合わない」と答えた、無礼な、しかし、優しい、少年が・・・

物思いにふけるカグヤは、その時気付かなかった。
後ろから近づく自転車の気配に。

「うう・・・結局見つからねえ・・・」

疲労困憊した宮彦は、もう何度往復したか分からない通学路を、家に向かって歩いていった。大きな川の向こう岸の町並みは、夕日に濡れて、赤く染まっていた。

「やあ、讃岐君・・・じゃないかな？」

その声に振り向くと、自転車にまたがった磯野が片手を上げて近づいてくる。

「ああ、磯野か・・・」

「君も彼女のコレに振り回されたクチかい？」

そう言つて、一つの封筒を取り出す。

「金塊だなんて、彼女いつたい何者なんだい？ 一般人じゃあないように思えるんだが・・・」

その問いに、宮彦は少しドキリとしながら、「さ、さあ・・・」と宮彦は返す。

「うん・・・？ あれは、安形さんじゃないのかい？」

磯野の指さす方向、少し先を腰まで届く黒髪をなびかせて歩く少女の存在に、宮彦は気づく。

あの長さからして、「カグヤか？」とも宮彦も思ったが、違う。

「いや、違うよ。アイツはあんな服持っちゃいない」

カグヤは、あのようなフレアブラウスは持つておらず、所持している服と言えば、制服と着物が一着だけのはずだ。

と、彼らの隣を、帽子を目深にかぶった男が通り過ぎていく。

「気持ちワリ 男だな」と思いつつも、特に気にも留めずにいると、少女の隣で自転車は減速し、手を彼女の待つ鞆へと伸ばす。

「な、何するんですか・・・離し・・・って！」

と、そこで少女の声を聞いて彼らは気付く。

安形美千代・・・カグヤだ。

男は鞆をつかむと、カグヤを突き飛ばす。

「やはり、安形さんか・・・クソッ！」

磯野は叫ぶと、自転車にまたがりペダルを漕ぎ出す。

そこで磯野は見たのだ。

鞆を持った男が、それほど大きくもない鞆の重量でフラついたのを。

それだけの重量、入っているとすれば、金塊！

磯野は今しがたカグヤから鞆を奪った男の自転車に追いつくべく、ペダルを踏む足に力を入れる。

ここで彼の名誉のために言っておくと、先ほど突き飛ばされたカグヤが、増水した川の中でもがいていることなど、彼は露知らなかった。

知っていれば、まず彼女を助けた。

彼は、そう、知らなかったのだ。

苦し・・・い・・・

昨日までの豪雨で増水した川の流れは、カグヤの華奢な体を容赦なく流して行った。

泳ごうにも、服が水を吸い、中々思うように動けない。

もがけばもがくほど深みに沈み、上下の感覚までも無くなってくる。

もう、駄・・・目・・・

薄れ行く意識の中で、カグヤは、何か温かいものが自らの手を掴み、引き上げるのを感じた。

遠い昔にも、感じた感覚。

そう、これは・・・

意識を闇に飲まれながら、カグヤは過去へと記憶を飛ばす。

「ケホッ・・・ゲホッ・・・ゴホ・・・ああっ！ クソっ！」

何とかカグヤを川から引き上げると、宮彦は悪態をつく。

水を吸った服は予想以上に重く、宮彦自身もだいぶ水を飲んだ。

「おい、アンタ、大丈夫か！？ おい！」

宮彦が体を揺らすと、カグヤは「ケホッ・・・ケホッ」と咳をし、大量の水を吐き出す。

「う、妾・・・は？」

幸い意識もあるようだ。

「全く・・・心配掛けさせるなよ」

ああ、そうか、とカグヤは思い出す。

あの時自転車の男に突き飛ばされた自分は、そのまま川に落ち、宮彦に助けられたらしい。

「・・・すまなかったな」

そう詫びるカグヤに、宮彦は少し驚いた顔になる。

「なんだ、今日はやけに素直だな・・・その服装と言い、悪いもの

でも食ったか？」

その問いに、「ああ、そうかもな」と答えるカグヤ。

「なんだ・・・今日のアンタ、気持ち悪いぞ」

と、その時、背後から足音。

振り向くと、黒い鞆を抱えた磯野が引き返して来ていた。

「全く・・・無茶をするな、君は・・・」

彼らの惨状を目に、磯野はため息をつく。

「もっとも、安形さんが川に落ちていたと気付かずに、そのまま追いかけて嬉しそうに鞆をひたくりからひたくりとくっつけていた僕はもっと滑稽だがね」

そう自虐的に話す磯野。

「そうでもないさ。ひたくりを追いかけるなんて、普通の人間にや中々真似できない。俺一人だったら逃げられてたさ」

そう言って、彼の手元の先ほど奪われた鞆を指さす。

確かに、ひたくりに向かって行った磯野の努力は恐れ入る。

しかし、金塊に固執するあまり、カグヤが溺れていたと言う事に気づけさえしなかったという点で、磯野は自らを許すことができないようだ。

「で、この金塊だが・・・」

黒い鞆を持ち上げると、磯野はそれを彼らの方に投げてよこす。

「・・・どういうつもりだ？」

「どういうつもりも何も、想い人の窮地に必死に金を追いかけているようなやつは、それを受け取るにふさわしくない・・・という事さ」

そう言くと、彼らに背を向け、磯野は自転車の方向へ歩き出す。

「だが忘れるな、僕はまだ諦めたわけじゃあない。必ず彼女をモノにして見せるからな！」

そう言い残すと、自転車にまたがり、磯野は去って行った。

「しかし、ひどい目に遭ったの・・・」

「全くだ、夏だからまだ良かったが、それでも早く家に帰って着がえないと風邪引きかねないな・・・」

そう言つと、宮彦は「ぶあつくしよい！」と盛大なクシヤミをします。

「それにしても、折角買ってもらった服が台無しじゃ・・・」

「うん？ 買ってもらったって？ 知らないやつに物貰うもんじゃないぞ・・・」

「雅子じゃから大丈夫じゃ・・・それより」

と、カグヤは宮彦の方を向く。

「こんなにズブ濡れになつてしまつたが、似合つて・・・おるかの？」

しばしの沈黙。

「そうだな・・・似合つて・・・」

答えを待つカグヤ。

「似合つては、無いと思う」

その答えに、「そ、そうか・・・」と、カグヤは声に失意の色を滲ませる。

やはり、どのような服を着ても、コイツは「似合つてない」で済ましてしまうのだろう。

そう、私のことなど、何も・・・

「・・・でもな」

と、宮彦は付け足す。

「最初に着てきた着物・・・アレは似合つてたぜ？」

「・・・え？」

キョトンとした顔のカグヤに、さらに宮彦は言葉を付け足す。

「そう言う服装だつてさ、なんて言うかな・・・そう、今は着慣れてないからまだ少し堅い感じがするけど、着こなしていくうちに、似合つてくるもんさ」

「そう・・・なのか？」

「そんなもんさ・・・ま、顔もそれなりに良いしスタイルも悪くないんだからさ、慣れて行けば大体の服は・・・って痛てっ」

事も無げに答える宮彦の肩を勢いよく叩くと、カグヤは急に駆け出す。

「おい、何すんだよ・・・」

宮彦が明らかな抗議の声を上げると、カグヤは振り返って舌を出して、「あかんべー」をする。

「このっ・・・朴念仁!!」

大声でそう叫ぶと、また前を向いて駆け出す。

「あのヤロウ・・・人が少々褒めたらつけあがって・・・待てコルア！」

宮彦も駆け出し、カグヤの後を追う。

あの時カグヤの頬が少し赤く見えたのは、果たして夕陽のせいだったのだろうか・・・

【第十二話】災いを想う人々

結局、カグヤが難題を出してから一週間。

締切期限を迎えた各人は、一週間前と同じように、中庭に集まっていた。

しかし・・・

「磯野と安部が居ないようだけど・・・」

何故か、その二人だけがそこに居ない。

「まあ、いいか・・・まず、俺はクリア・・・ってことでいいんだよな？」

そう宮彦が問いかけると、学校用のにこやかな笑みでカグヤ否、安形美千代は答える。

「ええ、基本的にあの金塊自体が一千万円以上の価値なので、私にあれを渡した時点で合格とします」

とりあえず、彼女に風説を流され、学園生活をフイにするという最悪の自体は免れたわけだ。

「ええと・・・それで、これが、紅龍関のお茶碗・・・です」

そう言って、島はおずおずと食卓などでよく見る『ご飯茶碗』を差し出す。

おお、本当に持ってくるとは。

だがしかし、次にカグヤの口から恐るべき言葉が飛び出る。

「・・・これは・・・違います」

「・・・え？」

硬直する島。

「私は『ご飯茶碗』などとは一言も言っていないません・・・骨董収集の趣味もある紅龍関の秘蔵の『湯飲み茶碗』が欲しいのです」

ええええええええ・・・

そりゃあないだろう。

一般人の感覚で言って茶碗と言えば飯を食べる茶碗である。

それに紅龍関が骨董マニアだと言うのは、一部のファンしか知らない事だ。

相撲好きの秋平の性格でもうつつたのだろうか？

「次」

呆然とする島の次は、片目に包帯を巻いた大友が前に出てくる。

「僕は残念ながら失格ですよ・・・見て下さいよ」

と、その顔を横切る包帯を剥ぐと、片目の^{まぶた}瞼が大きく腫れあがっていた。

宮彦が事情を聞くと、彼は渋々ながら答えた。

「いえね、夜の帰り道に釣り竿で釣り上げてやろうと思ったんですが・・・」

「あ、なるほど、強盗かなんか間違われて殴られた・・・ってか」「そう言う事です・・・まあ、いい経験になりましたよ」

宮彦ならば、いい経験とはとてもではないが言えそうにない。後は彼がそちらの^け氣に目覚めないことを祈るばかりである。

「つと、次は俺だな・・・」

と、一二三がズイっと前に出てくる。

「これが約束の品でございます、姫様」

そう気取りながら、大きな紙袋を何個も差し出す。

ホントに全部作ったのか、コイツは・・・

「うむう・・・これは・・・」

これは・・・バレたか？

つい宮彦も不安になる。

しかし。

「まあ、いいでしょう、クリアとしま・・・」

カグヤがそう言いかけ、一二三が歓声を上げようとした時だった。

「あ、居た居た・・・おい、一二三！」

と、それに割り込んだのは一二三と宮彦共通の有人、加藤である。
「何だよいったい・・・」

勝利のほろ酔いに水を差された一二三は少々不機嫌だ。

その一二三と同じく不機嫌な加藤は、ブランドバッグの詰まった紙袋を指さして叫ぶ。

「何だよじゃないだろ、カバン作りのバイト代、とっとと出せよ。これ作るの手伝ってやっただろうが、」

あ・・・

「バカッ・・・お前は・・・」

恐る恐るカグヤの方向を振り向く一二三。

「あ・・・あの、これはですねえ・・・」

「失格」

「あーあ・・・」

「そんな・・・」とがつくり膝を付く一二三を慰めていると、背後から大きな声がする。

「うあっはっはははは！ 待たせたなあ！」

振り返ると、そこにはマンホールの蓋を担いだ一人の男。体中から大量の汗を吹き出し、今にも倒れそうだ。

中庭中から、彼を応援する声が聞こえてくる。

「ガンバレー！！」

「あと少しだぞー！！」

いつしか、宮彦らも彼を応援していた。

そして、また一步、また一步とカグヤに近づく。

彼女も、その姿に驚き、口を手で押さえている。

「あなたは・・・」

しかし、その後彼女の口から出た言葉に、男は叩きのめされることになる。

「・・・誰？」

あ・・・

男は静かに、崩れ、落ちた。

「いやー・・・人間変わるもんだな・・・」

「うむ・・・確かに」

先ほどマンホールの蓋を担いで現れた阿部について、中庭のベンチで宮彦は一二三と話し合っていた。

結局彼自身は中庭にたどり着けなかったため失格となったが、一週間ほぼ不眠不休でマンホールの蓋五個を引きずり続けた結果、彼の体は驚くべき変貌を遂げていた。

大きく出ていた腹は引込み、四肢は筋骨隆々とし、頬も余計な肉が落ち、二重あごも改善され、まさに本物のイケメンと化していた。

「まっ、あれなら彼女の二人二人できて諦めもつくだろうがな・・・」

「だといいがな・・・」

それよりも、気になるのは磯野だ。

とつくに約束の時間を過ぎていると言うのに・・・

と、その時、無機質な電子音が響く。

誰かの携帯の着信音だろうか？と宮彦が辺りを見回すと、丁度大友が携帯電話の呼び出しに應えるべく、折りたたみ式のそのボディを開くところだった。

「はい、もしもし・・・え、本当ですか!？」

えらく狼狽ろうばいしているようだ。

何かあったのかと宮彦も不安になる。

「はい、はい・・・分かりました。磯野は無事なんですね？ ええ、今すぐそちらに向かいます・・・では」

そう言うと、電話を切る。

「どうしたんだ・・・？」

磯野に何かあったのだろうか？

心地の悪い胸騒ぎがする。

「磯野が・・・病院に運ばれたらしい」

それは、思いもしない答えだった。

「磯野！」

病室のドアを勢いよく開けると、病床に磯野が横たわっていた。

「なんだい騒々しい・・・病院では静かにするものだよ」

そう言いながら、ジュブナイル小説をチェストに置く磯野は、いたって元気そうだった。

「何だよ・・・心配させやがって・・・」

「全く、心臓に悪いですよ、貴方は・・・」

「良かった、何事も無さそうで・・・」

「なんだ、元気そうじゃねえか」

「ともかく、大事無さそうで安心しました」

その姿を見て、各々脱力する。

「いや、心配掛けてすまなかったね・・・」

「一体どうしたのですか？ 怪我など貴方らしくもない・・・」

大友の問いに、磯野は恥ずかしそうにしながら答える。

「いや、崖で燕の巣を取っていたら崖から落ちてね・・・死ぬかと思っただよ」

事も無げに話す磯野に、一同は啞然とする。

崖から落ちて骨折だけって・・・ホントにこいつは人間だろうか？

宮彦はそんな疑問を頭に浮かべると、それを読んだかのように磯野は口を開く。

「おいおい、そんな顔をするなよ・・・僕だってサイボーグじゃない。打ち所がたまたま良かっただけさ」

それでも、やはりギブスで固定された足などは見ていて痛々しい。「ともかく、皆お見舞いに来てくれてありがとう」

さわやかな笑顔で、磯野は皆に微笑みかけた。

「讃岐君、少し良いかな？」

その後各員の難題の達成状況を報告したのち、帰ろうとしたところだった。

「おい、宮彦、どうしたんだ？」

一二三の問いに、「先行っててくれ」と返すと、一度は出かけた病室にもう一度足を踏み入れる。

「で、話って？」

宮彦は、ベッドの横の椅子に腰掛ける。

「讃岐君、君以外の全員が敗れ、彼女はもう一度、君の彼女と言うべき場所に収まったと言える」

いや、元々こちらにそんな気はなかったんだが・・・
心中で宮彦は呟く。

実際、彼はこの中の誰かに学校に居る間でもカグヤを押しつけられたら、と思っていた。

たとえ学園生活をフイにしようとも、だ。

しかし、今は・・・

「僕も心から君たちを祝福し、応援しようと思う」

「そ、それはどうも・・・」

「しかし・・・だ」

いきなり真剣な調子に磯野の声が変わったのを気取り、宮彦は少し体をすくませる。

「もし、彼女を泣かしたりしたら、その時は容赦なく君を殴る」

「・・・ああ」

「もし、彼女を笑顔にしたいなら、その時は容赦なく僕を頼れ」

「・・・ああ」

「もし、彼女の心が少しでも君から離れれば、その時は容赦なく彼女を奪おうとする」

「・・・ああ」

ここまで、磯野はカグヤの事を・・・

「分かったな・・・」

「・・・ああ」

ふと合わせた磯野の眼には、強い光が湛^{たた}えられていた。

【第十三話】災いへの布告

携帯のアラームの音。

何か愉快的な夢から宮彦は覚めると、半分覚醒しきっていない頭でカーテンを引く。

「ああ・・・いい朝だ・・・」

緩みきつた顔で伸びをして、手を寢床につくと「ふに」という感触がする。

うん・・・？

「ふに」・・・？

と、手を付いた傍らを見遣ると、宮彦はそこで硬直する。

一人分しかスペースの無い布団の中に、宮彦の他にもう一人。

白い寝巻きはその裾が大きくはだけ、細い足が露わになり、開いた襟元からは胸元が垣間見える。

長い黒髪は布団の上で乱れ、扇情的な雰囲気^{たるま}に拍車をかけている。
こ・・・こここここれはイッタイ！？

「ズザザ」と後ずさりすると、彼は背中をしたたかに本棚に打ちつけ、その拍子に本棚の上に置いてあった達磨^{だるま}が落下し、彼の頭に打ち付けられる。

「あだっ！ つ・・・」

それら諸々《もろもろ》の刺激で、一気に宮彦の頭の残り半分も覚醒する。

何故・・・何故コイツがここで寝ているう！？

どうしてカグヤが宮彦の寢床で寝ているのか、彼には全く理解できなかった。

こ・・・これはいわゆる「据え膳食わぬは」とか言うやつなのか？
そうなのか！？

「いや・・・」

と、よくよく考えて「それはないな」と宮彦は思いなおす。

コイツの性格からしてこちらをからかおうとコッソリ寢床に忍び込んだハラであろう。

「どちらにせよ、起こさないようにしなきゃな・・・」

そうしなければ、何か言いがかりを付けられかねない・・・と、宮彦がこっそり部屋を出ようとした時だった。

「ふぁ・・・あゝあ・・・もう、朝かの・・・」

と、のっそりと蠅の止まるような動きで起き上がるカグヤ。

あ・・・ヤバ・・・

と思つたのも束の間。

まずカグヤは視線をこちらにやり、次に自らの服装を見る。

そして数瞬硬直した後、面白いようにみるみる顔が赤くなってくる。

あ、故意じゃなかったのか。

そう宮彦が心中で呟いた瞬間だった。

「い・・・」

い・・・？

「いやあああああああ！！」

朝の閑静な住宅街。

少女の叫び声が響くと、それはそのまま朝もやの中に吸い込まれていった。

「うっ・・・何で俺が引つ叩かれにやなんのだ」

宮彦は、方の頬を赤く大きく腫らしたまま、通学路を歩いていた。俺は何もしてないのに・・・」

宮彦がぶーたれると、傍らの元凶が事も無げに言う。

「見物料じゃ、見物料」

「アンタが寝ぼけて勝手に俺の布団に入ってきたんだろ・・・」
真相はこうだ。

まず、夜中に目を覚ましたカグヤがトイレに行き、無事に部屋まで戻ってくる。

そしてそのあと、そのまま自らのベッドに戻れば良かったのだが、半分眠った、それも船を漕いでいたような状態だったため、そのまま間違えて宮彦の布団にもぐり込んでしまったそうだ。

「部屋を別々にしない貴様ら家族が悪い」

「あんなに小狭い一軒屋じゃ無理だ、無理」

彼らの住んでいるのは、未だにローンの残った築二十年の一戸建て。

一階にはリビングとキッチン、両親の部屋にトイレと風呂、そして二階には宮彦の部屋と、小さな小さな三畳ほどの物置。

「とてもじゃないがもう一人分の個室なんてない」

「あの金を使ってもか？」

と、カグヤに言われ、彼女が持ってきた金塊の存在を思い出す。

一つの大きさで一千万を大きく上回る価値を持つ金塊が、詰め込めるだけ詰め込める鞆をカグヤは彼らに渡していた。

あれだけあれば、ローンの返済どころか豪邸が一軒立ちそうなものだが……

と、そこでさらに新たな疑問が宮彦の頭に浮かぶ。

「なあ、あの金や月一で払われる給付金って、やっぱり税金から出てるのか？　だとしたら、罪人一人あたりにあれだけの金を与える月ってのは、どれだけ豊かな所なんだ？」

確かに、一人あたりにあれだけの金を与えているならば、毎年どれだけの月の人間がこちらに流されているか知らないが、月の都の政府と言うやつは、とてつもなく豊かなはずである。

「違うな。あれは税金ではなく、妾の資産の一部じゃ」
わらわ

「一部……？」

いまいち話の全容が分からない宮彦は、つい鸚鵡返しで返してしまふ。

「そつじや、まず地球に流される者は一度全ての資産を金に換算さ

れ、その総量に応じて、持参できる金の総量に対する割合が決定する」

「ほうほう・・・それで？」

そう促すと、カグヤも続いて話す。

「それで、決まった金を持参して、その総量が一定値以上の場合、さらにその半分を百二十等分して、十年間の間、毎月給付金という形で給付するのじゃ」

「へえ・・・つまり、元々持つてる資産が多ければ多いほど、こちらでの生活に不自由なくなる・・・ってことか」

「端的に言えばそうなるが、ある程度の平等化を図るために、金の総量が多ければ多いほど、持つて行ける金の量も少なくなってくるのじゃ」

「ふん・・・」

という事は、カグヤの元々の総資産は、王家と言う事もあつて、かなりのものだったらしい。

本当ならば、自分など一生顔すら見ることすら叶わなかったであろう。

そんな人物が、自分の隣を歩いていると思うと、少し感慨深いものを感じる。

と、その時。

「待ちなさい！」

と、鈴のなるような甲高い声。

壁から飛び降りて華麗に着地し、彼らの目の前に現れたのは、青みがかった銀髪の少女。

「安形美千代・・・この私と、学校一の美少女の座をかけて、勝負しなさい！」

呆気にとられるカグヤに、頭を抱える宮彦。

うあ・・・何だかまた災難の予感・・・

宮彦は、また自らの身に災いが降りかかってくるのを感じずにはいられなかった。

「え〜と・・・池速命さん^{いはやみこと}・・・でしたっけ」

そう言つて、宮彦は目の前に座る少女の名を確かめる。

結局彼女は、朝にあんな宣戦布告をしておいて、「詳しい話はまた昼休みにするから、待つときなさいよ!」と捨て台詞を残し、去つて行つてしまった。

そして昼休み、彼女は宣言通りやつてきた。

「ええ、間違いありません」

そう返事をして、右の側に大きくまとめた銀髪を揺らしながら、小さく一礼する動作さえ、「美しい」と思える。

実際彼女、カグヤが来るまでは「学校一の美少女」として、学校中からもてはやされていた。

美少女コンテストか何かにも、本人曰く、グランプリ寸前まで行つたらしい。

しかし、カグヤが来てからというもの、話題は全てカグヤに持つて行かれ、彼女に注目する者はめつきり減ってしまった。

「と、言う訳で、皆さんに誰が学校位置の美少女かという事を知らしめるため、貴女に勝負を申し込みに来たのです!」

そう、「ビシィ!」という擬音すら聞こえてきそうな勢いでカグヤを指さす命。

それに対し、「良いですよ」とアッサリ答えるカグヤ。

「え・・・良いの?」

完全に勢いを削がれた命は、思わず問い返してしまう。

「あ・・・ゴ、ゴホン・・・それでは、最初の勝負は夏休み前の期末試験・・・その合計偏差値が高い方が勝者です、よろしいですね」

カグヤの返答も待たずに、命は教室から足早に出て行ってしまう。

「おい、いいのか? 彼女、滅茶苦茶頭いいぞ?」

實際命は、校内の試験では毎回五百人中一桁を常に叩き出してい

るらしい。

「よい。負けようと勝とうと妾には関係ない事じゃし、学校一の美少女の称号など、何の意味も持たない」

確かに、それはそうである。

称号など、所詮は限られた区域、限られた時間しか意味のないものだ。

「それに・・・」とカグヤは付け足す。

「それに・・・何だ？」

少し口元に笑みを浮かべ、カグヤは答える。

「・・・面白そうじゃからじゃ」

その答えに、宮彦はまた頭を抱えた。

【第十四話】災いと賞品

まったく、毎度思うが、テストなんてものは何故この世に存在するんだろうか？

日曜日の昼下がり。

クーラーの良く効いた居間で最後の悪あがきをしながら、宮彦はそんな事を思うのだ。

既にテストは明日に迫っている。

今更あがいたところでどうにもならないかもしれないが、何もしないよりはずっと良い。

ふと前を見遣ると、カグヤがレースゲームに興じていた。

あの日以来気に入ったのか、カグヤはちよくちよくあのゲームをするようになっていた。

「・・・・・・・・」

終始無言である。

集中するためかヘッドホンをして雑音を遮断しているおかげで、ボタン音以外は勉強の邪魔になるような音も出してはいない。

しかし、体を左右に傾ける癖は直ってないらしく、時々倒れそうになる。

「・・・・・・・・ふう・・・・・・・・」

一レース終えて息をついたところを見計らって、宮彦は声をかける。

「なあ」

「うん？」

何か用かと言わんばかりの顔でカグヤは振り向くと、ヘッドホンを外す。

「勉強しなくていいのか？」

「何故じゃ？」

何故じゃって・・・・・・・・あのなあ・・・

思わず宮彦は頭を抱えなくなる。

カグヤは命とあんな約束をしたにもかかわらず、出題範囲が発表されたこの一週間はおるかテスト前日の今日でさえ勉強するそぶりを見せていない。

「そんなんじや大差をつけられて負けるぞ？」

「大丈夫じゃ、妾は負けんし、負けても何も失うものはない」
負けても何も失わないと言うのは確かに正論である。

実際、彼女は学校一の美少女の称号などに、それほど固執していない。

それどころか、どこか疎ましく思っている節すらある。

「後で吠え面かいても知らねえからな」

「勝負をするからには負けん。それが妾の信条じゃ」

そう言つと、またヘッドホンを付けて、ゲームに興ずる。

本当に、大丈夫なんだろうか・・・

「はあ・・・駄目だった・・・」

「お前もか、マイブラザース」

そう言つてしなだれかかってくる一二三の顔面に拳を喰らわせると、宮彦はゆるりと立ち上がる。

テスト最終日。

やはり付け焼刃は付け焼刃でしかなく、いざテストとなると何の役にも立たなかった。

それをこの五日間で思い知らされた気分である。

「毎回思い知らされてるはずなんだけどな・・・」

「うん、何か言ったか？」

思わず口からこぼれた心のつぶやきを「いや、何も」とごまかすと、宮彦は鞆を持ち上げて教室から出ることとする。

と、その時。

「のわあ!？」

「きゃああ!？」

誰かと額をしたたかに打ち合わせると、宮彦は尻餅をつく。

「あ痛たたたあ・・・あれ？」

「うっ・・・うん？ 貴方は確か・・・」

そう言つてスカートを抑えながら立ち上がったのは、先日のセミロングの銀髪。

命である。

「大丈夫ですかあ？」

と、学校モードのカグヤが宮彦の方へ駆け寄ってくる。

「丁度良かった・・・安形さんに一つ申し上げたいことがあります
て・・・」

服の裾の水コリを払いながら、命は話を切り出す。

「まず、今回のテスト・・・ハッキリ申し上げますと、私は勝利する自信があります」

「はあ・・・」

「そして、これは本来あの時先に申し上げておくべきだったのですが・・・」

と、急に真剣な表情をする命。

「この三番勝負で私が勝ち越した場合・・・讃岐君を私に下さい」
は・・・

「はあああああ!？」

と、絶叫する宮彦。

「ええ、いいですよ」

と、即答するカグヤ。

「え、ちよつと、待・・・」

「では、せいぜい夏休みが始まるまでの間に、彼と思い出をたくさん作って置いて下さいね」

「はい、貴女が羨ましがするような思い出をたくさん」

笑顔で言葉を交わす両者だが、目は全く笑っていない。

教室を優雅に一礼しながら出て行く命を、宮彦は目で追う事しかできなかった。

「なんで俺が俺の了解もなしに賞品になるんだよ……」

帰り道、宮彦は盛大に落ち込んでいた。

彼の意思とは無関係に、気づけば宮彦は、彼女らの対決の勝者への賞品となってしまうていた。

「うるさい……勝てばよかるう、勝てば……」

「言い寄られるのが嫌だから俺を恋人役に据えたなら、なんで断らなかったんだ？」

どこか不機嫌なカグヤに、宮彦は問う。

もともと学校の男子たちから言い寄られるのがうざったいため、カグヤはわざわざ恋人の位置に宮彦を置いたのだ。

もし宮彦が命に奪われた場合、カグヤには多くの男どもが群がるであろう。

「ふむ、そうじゃな……しいて言えば」

「しいて言えば……なんだ？」

だいたい分かり切っているが、あえて聞いてみることにする。

「面白そうじゃからじゃ」

やはり、このワガママ姫は、なんでも「面白そうだから」で片づけてしまうのであろう。

今度病院に行く機会があれば、胃に穴が開いていないか見てもらいたい気分の宮彦であった。

【第十五話】災いの実力

「うつ・・・」

机にへばりつき、頭を抱える宮彦に、その上から重なるようにさらに一二三がへばりつく。

「おう、兄弟よ、お前さんも燃え尽きたか・・・」

期末テストの最後の一枚が返却され、宮彦は自らの凄惨たる点数に盛大に凹んでいた。

「うつ・・・帰ったら殺される・・・」

物理的に、ではない。

精神的にだ。

恐らく説教五時間は間違いないだろう。

「そう言えば・・・安形さんはどこに行っただ？」

ふと隣をみやると、カグヤの姿がない。

「さあ・・・池速さんとここでテストの点数比べでも・・・」

と、言いかけたその時だった。

『はあああああああ！？』

という大勢の合唱が聞こえてきたのは、隣のクラスからだった。

何事かと思い隣のクラスの一二三と共に覗いてみると、教室の中心に黒山の人だかりが出来ていた。

人山を掻き分け、二人は中心へと進む。

道中聞こえてきた「ちよつと、押さないでよ！」とか「痛たたた・

・やめてくれえ！」といった抗議の声はあえて無視した。

「お、あれは・・・」

「なんだなんだあ？」

二人して最前列の人壁の上から顔を突き出すと、中心で余裕の笑みを浮かべる長い黒髪の少女と、その少女を睨みつける銀髪の少女が居た。

カグヤと命だ。

「くう・・・全教科百点なんて・・・貴女、不正でもしたんじゃないの!？」

「やだなあ、不正だなんて・・・一度疑われて全く別のテストやられた私の身にもなってくださいよ」

ああ、そういえば・・・と、宮彦はカグヤが一度丸一日職員室に呼び出されていた事を思い出した。

曲がりなりにも県下では指折りの進学校であるこの学校でそんな点数を出したとなると、確かにカンニングの疑いも出てくるだろう。「全教科百点・・・かあ・・・勝ち目ないわな、そら・・・あれ、どこ行くんだ?」

一二三の制止を無視し、こっそり後ろに回り込んで命のテストを覗き込んで見るが、その点数だつて十分驚愕に値する点数だった。ほとんどのテストが九十代で、二、三個八十代後半が混ざっているものの、宮彦からしたらどれも滅多に取れない点数ばかりであった。

「ん・・・? どうした?」

「いや、なんだか自分が情けなくなってきたな・・・」

打ちのめされた気分で元の位置に帰ってきた宮彦に、一二三は不思議そうな顔をする。

と、その時であつた。

「あ・・・讃岐君?」

あ、ヤバ・・・

命と偶然にも目が合ってしまった。

しかし、時すで遅し。

彼に気づいた群衆に、真ん中へ二人の女神への生贄としてに祭り上げられてしまう。

「うわ、はなせよ、おい・・・一二三!」

「頑張つてこいよー」

助けを求めた唯一の相手は、面白そうに手を振って彼を送り出していた。

「うわっ・・・あ痛たたた・・・あ」

目の前には、仁王立ちで佇む二人の少女。

蛇に射竦められた蛙のように、宮彦は身動きできずにいた。

「これでまた一步・・・あなたの讃岐君への道が遠のきましたねえ？」

と、妖しい笑顔でカグヤ。

「フフ、貴女こそ、残り二勝負、くれぐれも気を抜かないように・・・」

それに、怒りを抑えてひきつらせた笑顔で応える命。

どちらも、やはり目は笑っていない。

「では、私はこれで・・・」

と、カグヤは宮彦の首根っこを掴んで引きずり、自らの教室へと向かう。

「お、おおおおおお？」

彼女の歩く先、群衆がまるでモーセの眼前の大海原のようにササ―と身を引く。

教室を出る直前、最後に宮彦が見たのは、カグヤの後ろ姿に向かって「あかんべー」と舌を出した命の姿だった。

主役のうち二人の退出によりギャラリ―も各々の教室へと引き揚げ、元の落ち着きを取り戻す教室。

その真ん中の机に座ろうとする命に、話しかける人影がいた。

「よっ、命、あの転校生にケンカ売るなんてやるねー」

「雅子・・・何しに来たの？」

その味気ない態度に雅子は、

「折角幼稚園から小中高と一緒に旧友が会いに来たってのに・・・つれないねえ・・・」

そう言つと、「よよよ」と泣き出すフリをする。

「ふう・・・用事があるなら早くしてよ・・・お昼ごはん今から食べるんだから・・・」

「まあまあ、せっかくだから一緒に一緒にさせてよ」

雅子はそう言いながら、いそいそとパンの袋を取り出し、隣の椅子を引きよせ、命の机の横に腰を降ろす。

「まったく・・・何しに来たんだか・・・」

「うん・・・ちょっと聞きたいことがあって来たんだよね」

パンをむさぼりながら、雅子は身を乗り出す。

「・・・何よ？」

「実際の所さ、自己顕示欲の強い命があの子に人気を持って行かれて頭に来てるのは分かるけど、何で『讃岐君を貰う』なんて条件を突きつけたわけ？」

「彼には何の好意も持つてはいないわ。恋人を奪う事で仕返しをしたい・・・ただそれだけの事よ」

その答えに、雅子は少し納得のいかないような顔をしながら、またパンをむさぼる。

「もしかしてさ・・・まだあの事、引きずってるとか？」

刹那、命は先ほどまで白米を啄^{つば}んでいた箸を止める。

「別に・・・」

そう静かに告げて、また箸を動かし始める命に、雅子は悪戯っぽい笑みを浮かべながら、次の仮説を突きつける。

「それとも、讃岐君の事を実は初めから好きで、それを横からあの子にかつさらわれた事の腹いせとか・・・」

「なっ・・・！　そ、そんな事・・・ゲホッ・・・」

いきなりの不意打ちに、命はおかずをのどに詰まらせ、悶絶していた。

必死に否定するが、その狼狽ぶりは傍から見ても明らかである。

「おーおー・・・さっき『好意は持つてない』なんてこと言ってたくせにこの焦りっぷり・・・図星かな、こりゃ」

「そ、そんな事・・・！」

「上手くいけば、これまで恥ずかしくて明かせなかった思いの丈を告げられるしね。『便宜上付き合っていましたたが、いつの間にか好きになっちゃいました』とかなんとか言っちゃってさ」

「なななな、そんな事は私は・・・！」

立ち上がって必死に否定するが、必死になれば必死になるほど疑わしい。

それを自らも意識してしまった命は、静かに座りこみ、顔を真っ赤にしながら俯いてしまった。

「ま、作戦自体は悪くは無いと思うけど・・・もし負けても誘惑なりなんなりで讃岐君を奪えばいいしね」

「うう・・・そりゃそうだけどさ」

俯いたままの命の肩を、雅子は軽く叩く。

「しっかりしなさんな・・・それに、仕掛けるなら早い方がいいよ？ 本人は朴念仁だから分かってないけど、ライバルだって多いんだから」

「え、それってどういう・・・」

「じゃ、私は帰るとするわ・・・じゃね」

手を挙げかけた命を残して、雅子は教室から出て行く。

「ライバル・・・か」

命のその呟きに、気付くものは居なかった。

「はあ・・・なんだかな・・・」

「よからう、あと一回勝てば、妾の勝ちで、そなたもあの者と付き合う必要もなくなる」

そのトゲのある口調に、宮彦はある疑問を口にする。

「なあ・・・なんでアンタはそこまで池速さんを目の敵にするんだ？」

「ああいった者は、一度正面から叩き潰してやらんと、地の果てま

で追ってくるからの」

その答えに、宮彦は「アンタをか？」と問う。

「違う」

どこかイライラしたような雰囲気を漂わせるカグヤ

「じゃあ・・・誰にだ？」

そう言った宮彦の顔に、カグヤは自らの鞆を渾身の力を込めてぶつける。

「あ痛っ！ 何すんだよ！」

「たわけ！ だからそなたは朴念仁なのじゃ！」

「はあ・・・？」

その理不尽な怒りに、宮彦は頭上にクエスチオンマークを浮かべるしかなかった。

【第十六話】災いの腕前

「・・・うん？」

とある朝、自らの机の上に一通の封筒が置かれているのに気づいたカグヤは、その封を開けると、険しげな顔をする。

「・・・おい」

「うん？ どした？」

命令口調の時は、大抵宮彦を呼ぶ時だ。

「ちよつと来てみる」

日直として早朝に登校したためか、他に教室内に人が居ないため、カグヤはいつもの口調で宮彦を自らの元と呼ぶ。

「これは・・・『果たし状』って書いてるぞ？」

「うむ、差出元はあの池速とかいう女子らしいが・・・これはマズイ・・・」

「はあ？ どれどれ・・・」

宮彦は、珍しく真剣な顔をするカグヤの持つ書面をひつたくると、重要そうなところにだけさーっと目を通す。

「えーと・・・『さて、本日、次の対決内容が決定いたしましたので、ここに通知いたします。次の対決内容は・・・料理？』」

はて、文面に何か問題でもあるのだろうか？

文面に問題がないのなら、思い当たる節はただ一つ。

「アンタ、もしかして料理できないの？」

その言葉に、カグヤは微妙そうな顔をする。

あ、できないのね・・・

今回ばかりは、カグヤの負けを確信した宮彦だった。

「さあ、やって参りました！ 想い人を巡る地獄の三番勝負！ こ

こ、調理室では、ギャラリーが両選手の登場を今か今かと待ち望んでおります！」

ステージの上では、雅子がマイクを握り、調理室一杯に集まったギャラリーを前に実況のまねごとをしている。

「あんなセツト・・・いつ用意したんだ？」

「どうも池速さんところが金出したらしいぜ・・・ああ見えて彼女、世界的にも有名な大会社のお嬢様だってよ」

ステージの上の審査員席に座る宮彦の疑問に、隣の一二三が答える。

「へー・・・知らなかったな・・・」

宮彦は、そのような事実全く聞かされていない。

よもや、自らと同じ学年にそのような大物が居るなど、思ってもいなかった。

「上手くいきや逆玉だぜ、逆玉・・・羨ましいなあ、二人の美女に想われて宮彦君は・・・どっちか負けた方俺におくれよ・・・」

「俺に決定権は無い・・・自力で何とかしろ」

「そんな殺生な・・・」とすぐる一二三を振り払っていると、ギャラリーが大きく沸き上がるのが聞こえた。

「さあ、準備も整ったようです！ それでは、両選手の入場です！」

ドラムが鳴り、ステージ両サイドからカグヤと命が入場してくる。

「フフ・・・今日の来る日をどれだけ待ち望んだか・・・」

「今日でこの勝負に決着をつけて差し上げます」

「あら、そんな事言っているのかしら？」

両者の視線が、バチバチと火花を立てて交差する。

「さあ、それでは両選手とも、所定の位置にお着きください」

雅子の合図とともに、二人ともそれぞれの調理台へと向かう。

その間には、食材が山のように盛られた机が一つ。

「食材は何をお使いになっても構いません、何を作っても良し、制限時間は一時間、それでは、よい・・・」

両者とも、合図を待ち、身構える。

「スタート!!」

その合図とともに、両者同時に食材のもとへと向かい、次々と調達していく。

「おっと、池速選手、パスタや生ベーコン、トマトなどを手に取ります、パスタメインでしょうか、相対する安形選手はマグロやイクラといった高級海鮮類がメインのようです」

カグヤは、高級な食材を次々と手に取っていく。

というか、手当たり次第に手に取っているようにも見える。

「大丈夫かなあ・・・」

あの日、カグヤの机の上に果たし状が置いてあった日。

物は試しとカグヤに料理をさせてみたら、とてつもない事になった。

通常、料理本を見ながら料理を作れば、どんなヤツが作ってもそれほどマズくはならない。

しかし、カグヤはどうも例外らしい。

彼女がクリームシチューと言って差し出した鍋の中のそれは、宮彦の記憶が確かなら、淀んだ玉虫色をしていた。

そもそも、自分で口々に味見できないようなモノを人様に食べさせられるわけがないのだ。

そんな事を考えている間にも、料理は進む。

「池速選手、非常に手慣れた様子で野菜を刻んでおります。作っているのはサラダでしょうか？ さあ、一方の安形選手は・・・」

と、それまで饒舌に動いていた雅子の口が止まる。

一瞬、全身の動きすら止まったようにも見えた。

「あ・・・あれ、は・・・?」

雅子の指さす方向には、おぞましい光景が待ち受けていた。

「う・・・うわぁ」

「なんだよ・・・ありゃ・・・」

一二三と宮彦は、どちらも引きつった表情で固まる。

カグヤが作業を続ける調理台の上に転がる、マグロの焦げた肉に、ぐちゃぐちゃになり、もはや原形を留めていない鮭の頭。

鍋の中には、毒々しいまでに鮮やかな青。

その香りは、とてもではないが料理のそれではない。

しいて言うならば、塩素系洗剤のそれだろうか。

ギャラリィの中にも、数人気分の悪くなった者が出たようだ。

「俺ら、大丈夫かな・・・」

不安そうにつぶやく一二三に、宮彦も不安そうな苦笑を返すしかなかった。

「さあ、両者料理が無事時間内に出来上がりました！」

終了を知らせるブザーと共に、両者の料理が、審査員である彼らの元に運ばれてくる。

「まずは池速選手の料理です、どうぞ！」

銀の蓋が開かれると同時に、トマトの香りが一面に漂う。

「これは・・・」

「へえ、おいしそうだな」

現れたのは、野菜の盛り合わせに、トマトソースパスタ、そしてミネストローネだ。

「野菜はこちらにつけて召し上がってください」

そう言って、赤いエプロンを付けた命が、小さなポットを差し出す。

ポットの下からは火のついた口ウソクが中のソースを温めている。

「では、頂きます」

「おう、いただきます！」

二人同時に手を合わせ、料理に手を付ける。

濃厚なトマトソースの Pasta に、それに対し味を少しあっさり目に抑えたミネストローネ、野菜に良く会うソース。

どれも絶品であつた。

「あゝ．．．こんなウマイ料理食べられるなんて．．．やっぱり審査員に立候補して良かったぜ」

審査員には、宮彦ともう一人が必要であつたが、希望者が数多くいたため、抽選となつた。

そして、厳正なる抽選の結果、一二三が選ばれたのだ。

「その内そんな事も言つてられなくなるぜ．．．」

宮彦は、そう言いながら、カグヤの料理の入った皿を指さす。まだ蓋に覆われているが．．．

「い、嫌な事を思い出させるなよ．．．」

宮彦と一二三は、出来るだけゆっくりと命の料理を噛みしめた。

「さあ、お次は安形選手の料理です、どうぞ！」

銀の蓋が開かれると同時に、辺りにこの世のものとは思えない異臭が漂う。

「こ、これはあ．．．」

「へ、へえ．．．独特な色づかいで．．．」

現れたのは、シチュー皿一杯に満たされた、先ほどの青い液体。

「ああ、こんなことなら遺言状書いておくんだつたな．．．」

「俺も、だな．．．フフ、骨、残つてるかなあ．．．」

二人とも覚悟を決めて、「いただきます」と声を合わせる。

「じゃあな．．．先に行くぜ、兄弟！」

一二三は、スプーンにすくつた青い液体を口に流し込み、そして．．．！

「う．．．ぐぐ．．．我が生涯に．．．一．．．片の．．．」

そこまで言つたところで、ガクリと崩れ落ちる一二三。

すぐに雅子が駆け寄り、助けを呼ぶ。

「誰か担架呼んで、急いで！」

「きよ、兄弟・・・くそう・・・俺もすぐ行くぞ!」

宮彦も覚悟を決めると、青い液体をスプーンですくう。
傍からは、カグヤの不安そうな視線。

うつ・・・そんな目で見ないでくれ・・・

宮彦は覚悟を決めると、鼻をつまみ、一気にスプーンの中身を流し込んだ。

「うつ・・・」

口の中に、様々な味が広がる。

魚の生臭さに、何か良く分からないモノの酸っぱさや、苦さ。

そしてむせかえるような肉の血の匂い

ここまで食材のマイナス面を強調させられるのは、一種の才能と言ってもよい。

宮彦は本能の拒否反応を振り払い、口の中の物を飲み込む。

「うつ・・・こ、れは・・・」

何か言いかけたが、そのままやはり崩れ落ちる。

薄れ行く意識の中、確かに宮彦は聞いた。

カグヤのこんなつぶやきを。

「あっちゃ・・・やっぱ駄目じゃったか・・・」

意識が・・・闇へ落ちて行く。

【第十七話】災いと石

夏休み前日。

熱気のこもった体育館から生徒達が一斉に解放される。

「いやゝゝゝ校長の話、長かったなあゝゝ誘拐なんて俺らには関係ない話なのに」

「それでも前の校長よりはマシってもんよゝゝ」

一二三のその言葉に、宮彦は前の校長の事を思い出す。

生徒の心情をよく理解しており、ノリは良い方だったが、その分話も長かった気がする。

体育祭やこういった集会の際には、常に二十分ぐらい時間が延長され、数人貧血で必ず倒れていた気がする。

それに比べれば、時間内で済ませてくれる今の校長なんて可愛いもんだ。

「お、アレ、安形さんじゃね？ その隣に居るのはゝゝ池速さんかな」

一二三の指さした方向を見ると、長い黒髪に、特徴的な髪型の銀髪。

あの宣戦布告以来犬猿の仲となり、勝負に関する事以外は全く顔も合わせようとしなかった二人が一緒に居るところとなるとゝゝ

「ま、勝負の打ち合わせなんじゃないか？」

そう言つて、特に気にも留めなかった宮彦だが、まさかこの後、彼をも巻き込む大事件が起こるなど、思いもしなかった。

「ゝゝで、話ってなんでしょうか？」

集会の後、校舎裏に呼び出されたカグヤは、少し不機嫌そうな顔をする。

「次の勝負の事で、少しお話がありまして・・・」

そう言つて、命はカグヤに耳打ちする。

「・・・！なるほど・・・それならば、讃岐君がどちらを想っているか、白黒付きますね」

「でしょう？　そうとなれば、早速準備しましょう」

そう言つて、敵同士であるはずの少女二人は、まるで親友同士のよういきやつきやと騒ぎながら、自分たちの企みを膨らせはじめた。

「はあ？　誘拐い！？」

教室の一角で帰り支度を整えていた宮彦は、素つ頓狂な声を上げる。

「そう、この手紙に・・・」

そう言つて雅子が差し出した手紙には、筆跡を読み取られないよう、新聞の文字の部分を切り抜いて綴られた文があつた。

「えつと・・・『安形美千代、池速命兩名を預かつた・・・返して欲しいければ、讃岐宮彦を下記の場所まで連れてくること』・・・つてなんで俺？」

普通、誘拐して身代金を取るならば、親に連絡を取るはずだ。それなのに、何故、犯人は宮彦に來いというのだろうか？

「どつかで恨み買ったとか・・・そういうんじゃないの？」

「一二三が後ろから会話に割り込んでくる。」

「うん・・・どうだろう」

頭をひねってみるが、それらしい節は見当たらない。

できるだけ棘を立てないように、対人関係には細心の注意をはらつていたはずのだが・・・

「とりあえず、行つてみるよ。警察には・・・」

「ああ、大丈夫、連絡してあるから」

携帯を取り出しかけた宮彦を、慌てた様子で雅子が止める。

「あ、そう・・・か、わかった、じゃあ、行ってくるよ!」

そう言って鞆を掴み、駆け出す宮彦の背を、雅子は手を振りながら「頑張つてねー」と見送る。

「狂言誘拐とは・・・よくそんなの思いつくねえ」

宮彦の去った後、一二三が呆れたように呟く。

「さあ、何のことかしら?」

うそぶく雅子に、一二三はまた溜息を漏らす。

「この様子だと警察に電話したつてもブラフだろ? 全く、嘘は良くないぜ?」

「あら、嘘が服着て歩いているようなあなたに言われたくないわね?」

その言葉に、一二三は「違いねえ」と苦笑する。

この二人も、そして宮彦も、この後起こることなど、何も知りはしなかった。

「それにしても、驚く讃岐君の顔が楽しみですね」

「そうね、必ずアツと言わせてやるんだからっ・・・と、それにしても遅いわね、迎えは」

彼女らは、買い出しを終え、商店街の路地裏で、じき迎えに来るはずの、命の家の車を待っていた。

「あとはどちらを讃岐君が選ぶか・・・」

「それが勝負のとき・・・負けませんよ?」

そう言つて、お互いに微笑みあう。

その様子は、つい先日までいがみ合っていた者同士とは思えない。と、その時、一台の黒い車が近づいてくる。

「・・・? あれかしら?」

命が首をかしげてそちらの方を見やると、車は彼女らの直前で停止する。

「おかしいわね、確かバンじゃなくてセダンで迎えに来てくれと言
つてあるはずなのに・・・」

彼女らの目の前にあるのは、黒い大きなバンタイプの車だ。

と、いきなり車のドアが開き、中から腕が伸びてきて、彼女らの
腕を掴む。

「・・・え!？」

「きゃあ!？」

成す術もなく車に引きずり込まれると、命は抗議の声を上げる。

「なにをするの!？ 乗せるにしてももう少し優しく・・・」

そこで、命は口どころか全身の動きを止め、小さく震えだした。

そこにあつたのは、いつもの執事の顔ではなく、全く見知らぬ男
の顔だった。

「ま・・・まさか・・・」

「本当に・・・誘拐されましたね」

目の前の男三人は、不敵にニヤリと口を歪めた。

「うん・・・？ 何だこりや？」

指定された廃ビルの部屋に到着した宮彦は、目を白黒させていた。
目の前には、他の部屋とは違い、装飾が施され、丁度類の数々が
並べられた豪華な部屋。

そして、そこには不釣り合いな、サングラスをかけた黒服を着た
男が二人。

缶コーヒーをすすりながら、椅子の上に腰掛けていた。

「あ、アンタたちが・・・誘拐犯？」

というよりは、どう見ても誘拐を防ぐ方の人間のようなが・・・

「ああ、貴方が讃岐様ですね？」

「はあ？ あ、ああ・・・」

ゴツイ方の黒服にいきなり様付け呼ばれ、狼狽する宮彦。

「そろそろお嬢様方も来られるはずなのですが・・・おかしいですね」

「あの、いったい何が・・・」

そう、宮彦が問いたただそうとした時だった。

「大変だ！ お嬢様が・・・お嬢様が本当に誘拐された！」

部屋に飛び込んできた彼らと同じような格好をした黒服が、随分慌てた様子で叫ぶ。

「何だと!？」

「間違いない、約束場所に、お二人の荷物が・・・」

そう言つて黒服の取り出した鞆の片方は、確かにカグヤのものだ。

「あの・・・状況の説明をお願いしたいのですが・・・」

恐る恐る手を挙げる宮彦の方を見ると、黒服は今度は仲間と顔を見合わせ、そして頷き、宮彦の肩をがっしりと掴んで話をはじめ。

「これから我々の言う事を・・・しっかりと聞いていただけますか？」

「は・・・はい・・・」

宮彦は、少し青ざめた顔でそう答えた。

「狂言誘拐!？」

「そう、その通りなのです・・・」

黒服から事の顛末を聞いた宮彦は、また素つ頓狂な声を上げる。

「でも、なんでそんな事・・・」

「私たちはお嬢様の言うとおりに動いていただけですので・・・ただ、勝負がどうのこうの・・・と言われていたような気がするのですが・・・」

おそらく、三番勝負の最後の勝負の演出だったらしい。

しかし、先ほどの男たちは・・・

「ちよつと待つてくれ、あんたたちがさっき言っていたホントに誘拐されたつてのは・・・」

「残念ながら本当です・・・」

「我々が行ったときには、既に荷物だけで・・・通行人が、お二人が連れ去られるところを見た・・・と証言していますので、間違いないかと」

どうやら、狂言誘拐を実行しようとして、本当に誘拐されてしまったらしい。

「車のタイプは分かっただけなのですが、残念ながらナンバーまでは視認できなかったようで・・・」

「そんな事より、すぐに、警察に連絡を！」

「もうしています・・・しかし、携帯がここにある以上、我々にできることといったら、もう何も・・・」

携帯を彼女らが持つていないため、GPSで位置を把握する事は出来ない。

「だからと言って・・・！」

そう言つて、宮彦は立ち上がる。

「どこへ行くのです？」

「探します・・・このままじっとしてるなんてガラじゃない」

そう言い残すと、扉を勢いよく閉め、駆け出す。

「若いな・・・行くあてなど、探すあてなど、どこにも無いだろうにな・・・」

部屋には、沈黙だけが残る。

「さて・・・私は少し空気を吸いに行ってくるか・・・お嬢様を探すわけじゃないぞ？」

「待て、私も付き合おう」

「私もだ・・・あの少年だけに任せられるか」

「フツ・・・我々もまだ若い・・・か」

三人はお互いに苦笑し合うと、急いで部屋を後にした。

「さて・・・ビデオはここでよし・・・と」

「三脚どこだっけ？」

「そこにないか？」

三人の中年は、彼女らに手錠をかけ、ベッドに座らせると、いそいそと何かの準備を始める。

手錠以外にロクな拘束をしないのは、両腕を使えなければ放置していても大した害はないという意味の表れだろう。

「い、いったいなにする気？」

恐る恐る、命が聞いてみる。

「何って、ビデオ撮影かな・・・」

「そうそう、とても表にや出せないような・・・な」

「ぐふふ・・・今回はこんな上玉が手に入ったし・・・さて、楽しめそうだな」

そう言つて、三人は下卑た笑みを浮かべる。

「い、いや・・・助けて・・・」

おびえる命に、毅然とした態度のカグヤ。

「大丈夫です、池速さん・・・讃岐君は、きっと来ます」

「この状況で・・・この状況で、そんな事」

目の前には、三人の男。

そして、宮彦はこちらの居場所を知る術を持たない。

このような絶望的な状況で、何故この少女はこのようにあの少年を信頼できるのだろうか。

「大丈夫です・・・信じて下さい」

その強い意志を込めた言葉に、命は、多少ながらも怯えた心を勇氣づけられるのを感じた。

「え、ええ・・・」

三人の男は、未だいそいそと準備を進めている。

「クソッ・・・やっぱ無理か？」

街中を走りながら、宮彦は多少の諦めを込めて呟く。

「携帯も持っていないじゃ、どこにいるかなんて・・・」

そう、命の携帯は今のはあのビル、カグヤはそもそも携帯を・・・

その時、宮彦はある物の存在を思い出した。

そうだ、あれだ、アレがあるなら・・・

携帯を取り出すと、急いで電話をかける。

「あ、秋平おじさん？ うん、そう・・・できる？ 説明している

時間はないんだ、急いで！ それから、警察にもこのことを・・・」

電話の向こうで狼狽する秋平を急かしながら、宮彦はその場所へと向かう。

間に合うか・・・？

何に間に合うかは間に合わないかは分からない。

だが、何か焦燥感のようなモノが、彼の背中を駆け抜けていた。

「ぐふふ・・・さあ、準備完了・・・」

「カメラよし・・・じゃあ、早速行きますか」

どうやら準備は整ってしまったらしい。

中年の内の一人が、下着一枚状態でにじりよって来る。

「いや・・・止めなさい・・・来ないで、助けてー！！」

「ぐふふ・・・誰もこないぞお？」

「いーやー！！ だれでもいいから助けなさい！」

泣きじゃくる命に、無表情なカグヤ。

「おや、お嬢ちゃん、怖くないのかい？」

やたら落ち付いているカグヤに、男が不精髭だらけの顔を近づけてくる。

「・・・どうやらそなたらの破滅は、すぐそばらしいぞ」

「・・・何？」

男が聞き返したその時、「バキィ！」と言う凄まじい音とともに、小さなプレハブの二階のドアが弾け飛ぶ。

「な、何だあ？」

「だ、誰だ？」

「警察？ 警察なのか！？」

慌てふためく男たち。

「なんだあ？ 最後の勝負って言うのはオッサンの相手してどっちがオッサンをヒーヒー言わせるかの勝負？」

バット片手におどける宮彦。

「本当に・・・本当に来てくれた？」

「・・・遅い」

涙で濡れた目を見開く命に、不機嫌そうなカグヤ。

「悪いね・・・どうにも最近床で寝はじめたせいか体が硬くてさ」
そう言つて、バットを使って準備運動のような動きをする。

「この・・・ふざけやがつてえ！」

「あのねえ・・・いくら俺が平凡凡の高校生って言っても、同年代のヤツとか二十代の大人ならともかくさあ・・・」

バットを投げ捨て、殴りかかってきた男の懷に飛び込むと、みぞおち鳩尾に拳を叩きこむ。

「げふっ！？ がっ、がはっごほっ・・・」

「人の道外れた四五十超えたメタボなオッサンにやられるかって・・・父さんのほうがまだ十倍強いよ」

男は床に転がり、鳴咽を漏らす。

「この・・・そいつは喘息持ちなんだぞ！？ もうちょっと年長者をいたわろうとかそう言う気持ちはないのか！？」

仲間の男が怒鳴る。

「いや、アンタらそんなこと言える立場かよ・・・」

どう考えても、女子高生を拉致して襲おうなどという卑劣漢が言えたセリフではない。

「おりゃあー！！」

気合いをこめてもう一人の男が三脚で殴ってくるが、宮彦はそれをひよいとかわす。

「のわぁ!?!」

宮彦に叩きつけられるはずだったエネルギーは腐りかけた木造の床を突き破り、男は上半身を床に埋める羽目となった。

「ほう、これがホントの『頭隠して尻隠さず』……ってやつですか」

脚と尻だけを床から生やした男はじたばたともがくが、抜けることも、落ちることも叶わないらしい。

「ぬう……くそう……」

残ったのは、咳をし続ける男に、床から生えた二本の脚。

そして最後に、パンツ一丁のオッサンが一人。

「さあて……もうじき警察も来るし、アンタらもこれでお終い……ってわけだ」

宮彦がにじり寄ると、男は後ずさりする。

「く、来るなぁ!」

しかし、このような状況においても、男は自らの勝利を確信していた。

そう、自分にはまだコレがある……!

ビデオの売り上げを上納した組員に入られた時のこれさえあれば……

男は、笑みをこぼすのを必死に我慢しながら、そののしまってある棚へと後ずさりするふりをしながら近づく。

そして……

「死ねえ!!!」

棚から取り出したそれを、男は構えた。

この男、何かがおかしい……

カグヤは、男の拳動不審さに、いち早く気づいていた。

宮彦が足を踏み出す前に、棚の方向に後ずさったようにも見える。そして、どこかその表情は、恐怖と言うより喜色でこわばっているように見えた。

そして・・・

「死ねえ!!」

「・・・! 危ない!!」

男が取り出したそれを何か知覚すると、カグヤの体は勝手にその射線に飛び出していた。

「・・・っ!!」

胸を、強烈な衝撃が打ち付ける。

薄れていく意識の中カグヤが最後に見たのは、拳銃を構えた男が、宮彦の拳を顔面に受ける姿だった。

「全く・・・無茶をするものだ」

「あたたた・・・もつと優しく縛ってよ、おじさん」

「表面をかすつてただけで貫通もしてないし体内に弾があるわけでもない・・・我慢しなさい」

肩に受けた傷の手当てを秋平から受けながら、宮彦は文句を言う。

その後、秋平がカグヤの腕輪の電波により位置を特定し、その連絡を受けて駆け付けた警察により、ノビているパンツ一丁の男と、残りの二人は、めでたく逮捕された。

「本当にじゃな・・・ともすれば死んでおったぞ?」

その隣で、カグヤがため息交じりに呟く。

「いや、アンタも十分無茶してるから・・・というか、何で生きてる?」

あの時、銃弾から宮彦を守ったカグヤは、なぜか無傷でピンピンしている。

至近距離で確かに胸に銃弾を受けたと思ったのだが・・・

「それは、コイツのおかげじゃな」

そう言って、首にかけたチェーンの先の青い石を取り出す。

表面に銃痕らしき傷は付いているものの、それ以外はヒビも入っておらず、ほぼ無傷と言ってもよい。

これに銃弾がぶつかって、カグヤは傷を負わずに済んだのだろう。

「ほう・・・これはサファイアかな？」

と、秋平

「さあ？ なんとという宝石かは知らぬが・・・昔、友人にもらった、約束の証じゃ」

約束の・・・証・・・？

この石・・・

この石・・・どこかで？

約束？

追い出されたら・・・家・・・で・・・？

「う・・・うう・・・」

「ど、どうした？」

いきなり頭を抱えた宮彦の顔を、心配そうにカグヤが覗きこむ。

「いや・・・だ、大丈夫・・・疲れて少しめまいが・・・」

「そ、そうか・・・」

「ああ、大丈夫だから・・・」

そう言いつつも、宮彦には先ほどの散発的な思考が何なのか分からない。

見たこともない石を、俺は・・・？

いや、そんな事はない。

そう言い聞かせ、頭を激しく振り、その思考を振り払う。

「さて、じゃあ、私はもう行くよ」

「あ、ああ・・・ありがとうございました」

「助かったぞ、礼を言う」

そう言って、二人で秋平に礼を言う。

秋平が去った後、命が彼らに近づいてくる。

「あの、ですね・・・」

「あ、池速さん、大丈夫・・・でしたか？」

こんなところでも通常モードと学校モードを使い分けるカグヤに感心しながら、宮彦はその様子をぼーっと見ている。

「今回の勝負ですが・・・」

「ダメになっちゃいましたね、どうしますか？」

そのカグヤの問いに、命からは思わぬ返事が返ってきた。

「勝負は、貴女の勝ちです」

その答えに、二人はしばらく呆然とする。

「私は、結局、貴女ほど讃岐君の事を信頼してもいなければ、身を呈して守るなんてこともできなかった」

「あ、あれは・・・体が勝手に動いて」

これは、カグヤの本音である。

考えるより、先に体が動いた。

そう、自らの身を盾にしても、コイツを守ろうと・・・

「でも・・・まだ、私は諦めない」

命は、言葉を続ける。

「必ず、貴女に負けないようになって、リベンジしてあげます」

そう言って、命は満面の笑顔で微笑んだ。

「・・・ええ、待ってます」

そう言って、カグヤも微笑み返す。

わだかまりは、既に溶けて無くなっていた。

「さて・・・大木、帰るわよ！」

「はっ！」

その言葉と共に、黒服が命の方に駆け寄る。

「では、失礼いたします・・・ありがとうございました」

最後に投げかけられた感謝の言葉に、宮彦は、「は、はあ・・・」と応じるのみだった。

「なあ、カグヤ？」

「なんじゃ？」

いつもの通学路を、並んで帰る。

しかし、二人とも満身創痍である。

「池速さんが言ってた、俺を信頼してたってのは……」

「あ、あれは……ほら、宮彦ぐらいしか、あの腕輪の事を知らぬから、の……」

「そうか」

そう短く答えると、再び二人の間に流れる沈黙。

「まあ、それがなくても信じておったかもしれないが……」

「え、今……なんて？」

「な、何でもない！！」

聞き取れなかった小さなカグヤのその呟きに、頭に疑問符を浮かべながら、「そうか」と宮彦は再び歩き出す。

「それより、ようやく名前で呼んでくれたのう」

「……何をだ？」

その言葉に、宮彦は再び頭に疑問符を浮かべる。

「妾^{わいわ}をじゃ。ずっと『アンタ』と呼んで『カグヤ』と名前で呼ばれた事は今までなかったからの」

「あれ、そうだったけ？」

「そうじゃ」

そう言われ、「そうだったかもしれない」と宮彦は心中で呟く。

だが、それならば……

「それなら、カグヤだって俺のことさつき初めて『宮彦』って呼ばなかったか？」

「……そうかの？」

「そうだよ、ずっと『そなた』って呼んでたじゃないか」

「そう……かもしれないのう」

「そうだって・・・」

その日は、あんな事があって疲れているのに、いつもより二人とも饒舌だった。

他愛のない事を話しながら、家路を歩く。

いつのまにか、宮彦にとってカグヤが居る事が、日常となりつつあった。

【第十七話】災いと石（後書き）

えー・・・いかがだったでしょうか？

今回の話のみやたら長くなってしまいました・・・

サブタイトルの石だって最後の方にチラッとしか出てきません。

なんか色々申し訳ありません（汗

相も変わらずつたない文章ですが、楽しんでいただければ幸いです。

幕間、その二

遙か昔・・・と言っても、まだ十代の私にとってだから、たかだか十数年前の事だ。

まだ物心の付いたばかりの頃、かつて父と喧嘩をした際、秋平に地球まで連れてこられた時のことだった。

その時である。

秋平の家の近くに住む少年と知り合ったのは。

「ほら、歩けよ、手えかしてやるから」

その少年は、川で溺れて泣きじゃくる私を助けたばかりか、手を差し伸べてくれた。

自分もびしょ濡れだと言うのに、なんてことはないフリをして手を差し出してくる。

そんな姿が、少しおかしくて、でも、凄く嬉しかった。

ああ、その帰りだったか・・・と思います。

あの少年と、約束を交わしたのは。

「なんでまだないてんだよ・・・もう川からたすけてやっただろ？」

「あの、ね・・・わたし、さ・・・」

「うん？」

ぐずりながら、おずおずと切り出したその言葉に、少年は振り向く。

「父さまに、ね・・・『お前なんていらない』って・・・」

言葉を紡ぐたびに、涙腺から熱いものが込み上げてくる速度が加速していったのを覚えている。

しかし、実際父にそう言われたかどうかは覚えていない。

子供ゆえに、言葉に含まれるその意味を過剰に受け取ってしまった可能性もある。

少年は、「ちょっと待ってろ」と言い、ポケットをまさぐる。しばらくして「手え出してみろ」と言われ、その言葉に従い、私

は手を出した。

「何これ・・・？」

手の平に転がったのは、小さな石ころだった。
青い半透明のその石は、光にかざすと小さな明りを中に湛^{たた}えてい
るように見えた。

「こないだ山で拾った、石だ。お前にやる」

「ありが・・・と」

涙をぬぐいながら、そう言って私がポケットに石をしまうと同時
に、少年は私の方から目をそらしながら、恥ずかしそうに口を開い
た。

「もし、さ・・・お前が家から追い出されても・・・」

躊躇しながら、言葉が続ける。

「俺が・・・俺んちが、お前の、帰る場所になってやるから・・・」
顔が熱くなるのを感じた。

「そつ・・・それって、その・・・」

幼いながらも、いわゆるプロポーズという言葉が脳裏によぎった
のは何故だろう。

「だから、その石はその約束のしるしだ」

そう言つと、今度は正面からこちらを見る。

「だから、さ・・・追い出されたら、俺んち来いよ！」

「う、ん・・・約束・・・！」

「ん・・・随分昔の夢を見たものだ・・・」

乱れた黒髪をわしゃわしゃとかき上げながら、カグヤはため息を
つく。

久方ぶりに蘇った、遠い日の記憶。

そう言えば、そのころ自分はまだこんな奇妙奇天烈な喋り方をし
ていなかったな、と、ふと思ひ出す。

「約束・・・か」

カグヤは寝巻きの懷から、首にかけたチェーンに繋がれた青い石を取り出す。

「覚えているはずもないのに・・・な」

月光にかざすと、小さな傷の付いたその石は十数年前と全く変わらない青い光を湛える。

石は変わらないが、人の記憶は変わるものだ。

あの少年も、自分のことなどとうに忘れているだろう。

当然・・・あの約束も・・・

だと言つのに、自分はいまだに青い石こんなものを持ち続けている。

きつと、自分の心は、内面の時間は、あの頃のまま・・・

「変わつても、進んでも、いなかった・・・」

王宮の中に籠つたまま、父の期待に沿えるよう、一生懸命従順な姫を演じてきた。

いつか、あの少年とまた約束を果たすことを夢見ながら。

「じゃが・・・な」

間仕切りの間から覗く、宮彦の後頭部にカグヤは話しかける。

「そなたと会つてから・・・少しずつ、動き始めたのかもしれない」
小さな小さなその眩きは、大きくいびきをかきながら惰眠をむさぼる宮彦には、決して届いていないだろう。

それにしても、いつからだろう、とカグヤは思うのだ。

この短期間のうちに、この男が自らの心の内に時折居座るようになつたのは。

自らの身を挺してまで、守りたいと思うようになったのは。

もしかしたら、あの少年にその姿を重ねているのかもしれない。
だとすれば、この想いはコイツに対してのものだろうか？

それともあの少年に対してのものだろうか？

そして、果たしてコイツは・・・自分の事を・・・

「・・・止めた」

他人の心の内など、考えても分かるはずがない。

例え一方通行でも、たとえ他人の影を重ねていても、きっと自らの想いは変わらないだろう。

ただ、コイツの傍にいられば、それで良い。

例え、役割だけ、表面だけの恋人役だとしても・・・
闇に沈んでいく意識の中で、静かに、そう思うのだ。

幕間、その二（後書き）

ごめんなさい、完全に十七話の蛇足です（汗

以後は少しずつ、カグヤの過去について明かされる・・・予定です。
予定は未定です。

変更になる可能性だってありますがその時はひたすらすいません。
では。

【第十八話】災いの災難

『そうか、御息災であらせられるか』

自らの監視対象の報告を終えた時。

モニター越しに映る精悍せいかんなその顔が、少しほころんだように見えたのは気のせいだろうか。

そんな疑問を抱きつつ、報告を続ける。

「はい、それどころか、地球こちうの生活を楽しんでおられるようにも見えます」

実際、こちらに来てからの方が、あの方の笑顔を見る機会は多くなった。

『そうか、それは良かった・・・ところで』

と、モニターの向こうの初老の男は続ける。

『あの方は、私をやはり恨んでいるのか？』

「それは、私には分かりかねます」

上司の問いに、ゆっくりと首を振る。

いくら精度の良いカメラを使おうが、遠くから見ていだけでは、人の感情までは読み取れない。

そう、たとえ気の遠くなるほどの年月を費やした技術だとしても、人の心までは覗けないのだ。

『恨んでおらぬわけがないか』

初老の男は、ゆっくりと息を吐く。

『あの方の父上、先代王君スメラミ様を私は・・・』

「閣下」

重々しく吐き出したその言葉を、ピシヤリと遮る。

「あれは致し方の無かった事なのです、閣下があの方を地球に送らなければあの方の命は今頃・・・」

『分かっておる・・・頭では、な』

そう言って吐き出された溜息は、四十万キロといった長い距離を

感じさせないほどの生々しさと、悲壮をはらんでいた。

『・・・と、少し長話をし過ぎたな』

そう言うと、モニターの向こうの顔は、いつもの業務用の引き締まった表情になる。

『これまでは陰からの警護・監視に専念してもらっていたが、これまで何も動きがないところを見ると、彼らが目標を狙ってくる可能性は低いだろう』

「実際、ここまで何の襲撃もないという事は、目標を反対派も大した脅威とは見てはいない・・・ということですね」

それまでの気持ちを切り替えるために、男が「あの方」と言っていたのを「目標」と言い方を変えた事に多少の驚きを覚えつつも、それに従う事にする。

『そこでだ、君にはこれまで通り監視を行ってもらうが、陰からという事ではなく、通常監視という事になる』

「監視の頻度を下げる、と」

『そうだ、目標が家に居る際の監視は行う必要はない。しかし、目標が外出している際は、できるだけ監視を行ってほしい、監視しやすい立場につけるように根回しも既にしてある。教育係として活躍した君にも見合った立場に、な』

淡々と任務を告げる上司の顔からは、もはや一切の感情と言ったものは読み取れない。

『そして、目標が月に帰りたいかどうかの意思判断、そして、目標を預かっている者が相応しい者か、それも君に判断してもらいたい。任務は以上だ』

月に帰るかどうかの意思確認・・・という事は。

「目標の赦免もあり得る・・・ということですか？」

『君がそれを知る必要はない、任務にだけ集中すればいい』

「申し訳ありませんでした」

モニター越しからでも十分にこちらを威圧する威力を持つ眼力に、一瞬射竦められる。

『まあ、いい・・・任務は以上だ、成功を祈る』

「はっ」

小さく敬礼し、通信を切ろうとしたその時、男がおもむろに口を開く。

『あの方を　　姫様を頼むぞ』

通信を切る瞬間、男の瞳が物憂げな光を湛えていたように見えたのは、気のせいだろうか。

「新任教師・・・ね」

体育館に集められた生徒の前でスピーチを行う若い教師を目にし、宮彦はそんな声を漏らした。

「ああ、それも二人ともウチのクラスに来るらしいぜ。担任と副担任どっちも辞職したってよ」

と、宮彦の前に座る友人の後藤が教えてくれた。

「じゃあ、担任の宮迫先生はどうしたんだ？　あの人はもう結婚してるだろ？」

元担任の人懐っこい笑顔を思い出しながら、宮彦は尋ねる。

「さあ・・・なんでも家業を継ぐとかな。家は名家だとかで、江戸時代は庄屋だったんだと」

「へえ・・・なるほどな」

しかし、夏休み開始直後、課外開始早々に新任教師と言うのは、少し不自然な気がする。

「まあ、気のせいだろうな」

「・・・何がだ？」

後藤の疑問に、「いや、こつちの話」とごまかしていると、いつの間にか、新任教師のスピーチはどちらも終わっていた。

どうやら、これでようやくこの暑い体育館から解放されるらしい。溜息を吐くと、宮彦は半分しびれた腰を上げる。

「えー……そう言う訳で、私が新しく君たちの担任となりました、
つきのまこと月野誠と申します」

そう言うつと、新たな担任は黒板に自らの名前を書き、後ろで縛った長い黒髪を揺らして振り向く。

「こう見えても、前の学校じゃ『まこっちゃん』とか『まこまこ』とか呼ばれてましたので、こちらでもそう呼んでもらっても結構ですよ」

そう言うつて微笑む優男は、遠くから見ただけでも美男子と分かる容貌をしていた。

目鼻はスツと通っていてバランスも取れている上、顔は小さく、スラっとしたモデル体系をしている。

まあ、多少やせ過ぎとも言えないこともないが……

「じゃあ、次は岩笠先生、お願いしまーす」

そう言うつて下がると、メガネをかけたOL風の女性が壇上に上がる。

「岩笠加奈子です……よろしく願います」

それだけ言つて、壇上から降りる。

「え……それだけ？　なんだかノリ悪いなー、岩笠先生」

そう言つた月野を、岩笠はジロリとねめつける。

「余計な事を言う暇があるなら、さつさと課外を開始していただきたいのですが」

「えー……このまま雑談していると岩笠先生に視線で殺されかねませんね。授業を始めますか」

そう言つて、月野は数学の教科書を取り出し、授業を始めた。

ふとカグヤの方に目をやると、なぜか目を見開いたままのポーズで固まっていた。

「……？　どうしたんだ？」

不安になった宮彦が尋ねると、カグヤはそれでハッと我に返り、
「な、なんでもない・・・なんでもない、うん」と、慌てたように
答えた。

「そう・・・か」

「なんだろう？」とは思いつつも、宮彦は、教科書を取り出して、
授業を真面目に受けることとする。

「はー・・・やっと終わった」

昼までの課外を終え、溜息を吐く宮彦。

「なあ、新しいあの先生、どう思う？」

いきなり席の隣までやってきた一二三のその問いに、宮彦は「う
ーん」と唸る。

「月野先生の方は・・・まあ、優しそうに見えるけど」

「あー、そうじゃないって、岩笠先生のほうだよ」

「岩笠先生？ うーん・・・」

正直、美人だとは思う。

が、しかし、どうも彼女からはどこか冷たいものを感じる。

「なんというか・・・とっつきにくそうな感じがするんだよな」

あれは性格の問題だろうか？

どこか人を寄せ付けさせないような独特の雰囲気を感じる。

「バカだなー・・・あれが良いんだよ」

「はあ？」

一二三のその答えに、宮彦は思わず素っ頓狂な声を上げる。

「ああいうの、時にフツと見せる弱さなんかが、良いんだよ・・・
わかるか？ いわゆる『ツンデレ』ってやつだ」

「『ツンデレ』ってそういう言葉なのか？」

というか、むしろあれは「ツンツン」で一つも「デレ」がない気
がするのだが。

「ま、お前は安形さんが居るから良いよなー・・・フラれても池速さんって選択肢もあるしな・・・変わってくれえ・・・」

そんな一二三の言葉に、宮彦は「変わるなら変わってやりたい」と、心中で呟く。

「あれ・・・そういえば、その安形さんは何処行った？」

「？　そういえば・・・」

教室内を見回すが、どこにもカグヤの姿は見えない。

「どうしたんだろう・・・何処にも居ない」

「先に帰ってるのかもしれない・・・これは俺にも流れが向いて来たか？」

とりあえず宮彦は教室から出る前に、勝手な事を言う一二三をどつておくことにした。

「先に帰るなど・・・薄情じゃ、のうつ」

「うわっ・・・ビックリした、なんだよいきなり」

丁度校門を出て数分辺りで、腰を弱くどついてきたカグヤに驚きながら宮彦は抗議する。

「少しは待つという事を知らぬのか、おぬしは・・・」

「そっちこそなんで遅れたんだ？」

「まあ、少し、小用で・・・の」

「ふーん」

あえて深くは聞くまい。

その時は、二人ともまだ、物陰から覗く気配に気づかずにいる。

楽しそうに話す一組の男女。

その後ろから、付きまとう影達。

しかし、まだ彼らはその気配には気が付いていないらしい。
それはそうだ、相手は民間人。

あらゆる能力において、戦闘のプロには遠く及ばない。

「周りに人はいない、民家もない・・・仕掛けるには今・・・か？」
影の内の一つが呟く。

「さあな、一人増えたが・・・」

「事情を知る者は消す必要がある・・・あの小僧もリストの中にある」

「あの者は殺さずに生け捕りにするべし。手傷を負わせ、追い込みやすくするのは構わんが、殺しては何事もままならん」

リーダー格の影の忠告に、残りの三つの影は頷く。

「残ったのは、我らのみ・・・しかし、王家の血を継ぐあの者さえ手に入れば・・・！」

先日 of 正規軍の襲撃により、彼ら反対派は四人を残して一網打尽となった。

丁度この任務を受ける直前の出来事だった。

燃え盛る基地から持ち出した指令書に従い、彼らは行動していた。
「月には既に味方も居るまい・・・しかし、あの者を我らが手に入られれば・・・」

「左様、我らに同調する者も出てこよう」

もともとかなりの急進派であった彼らは、本国にもシンパは少ない。

それどころか、同じ急進派からもその過激思想からキワモノ扱いされていた。

「しかし、あの者を手に入れば、それも終わる」

一人の影が静かに、そして力強く呟く。

飯にも王家の姫君、罪人となったとしても、その求心力は未だ強い。

その姫を名目上のトップにつけ、月の同志に呼びかければ、賛同者が得られるはずだ。

「おしゃべりはそこまでしておけ、大事の前の小事だ・・・」
リーダーにとがめられ、半分熱に浮かされていた彼らは落ち着きを取り戻す。

「よし・・・行くぞ!」

影は、宙へと舞う。

「それにしても、昨日のドラマではの・・・」

地球のドラマについてくどくどと語るカグヤの方を、ふと見た瞬間だった。

「・・・っ! 危ない!」

「え・・・?」

カグヤの背後から迫っていた白刃から、宮彦は彼女の身をこちらに引き寄せることで彼女を守った。

自らの胸の中で目を白黒させているカグヤを抱いたまま、宮彦は声を上げる。

「あ・・・アンタら何者だ!??」

「答える必要などない」

黒いマントを羽織った男が冷たく答える。

右からも、同様の衣裳の男が現れて言う。

「左様、ぬしは何も知らずにここで朽ちるがよい」

ですよねー、チクシヨォー!

そもそもいきなり刀振り回して襲ってくる輩が、「何者か」という問いに答える訳が無い。

「とにかく・・・逃げないと・・・!」

そこは、海に面した崖沿いの道路。

周りに建物らしきものはない。

隠れられそうないところもない。

宮彦はカグヤを小脇に抱えなおした状態で走る。

「こら、離せ！　いくら妾めかけが小柄とはいえこのような・・・」

「黙ってる、舌噛むぞ！」

小柄といってもそれは宮彦と比べてという事で、カグヤ自体は平均的な女子高生と身長も体重もそう変わらない。

しかし、宮彦は一応体力には自信があった。

こう見えても中学までは陸上部でエースを張っていたのだ。

これくらいは・・・

「や、やっぱそれでもしんどい・・・」

流石に、少し　否、大分厳しい。

「・・・民家！？　助かった・・・」

前方に見えた建物の蔭に、宮彦は安堵する。

が・・・

「無駄だ・・・」

崖から這い出た影の一撃に、路面に吹き飛ばされる。

「く・・・あ」

「のわあ！？」

カグヤともども地面に投げ出されると、彼の目には信じられない光景が映っていた。

「・・・これは、夢か？」

「残念ながら違うの・・・」

目の前の光景をあつさり現実と言えるほど、宮彦はおかしな思考回路はしていない。

「人が・・・人が飛んでるんだぞ！？」

彼の言葉の示す通り、目の前には宙を舞う黒マントの人影二つ。

先ほどの男たちと同じ服装だが・・・

「追い詰めたぞ！」

「覚悟めされよ！」

そんな事を考えているうちに、その二人も追いついて来た。

「王族の血・・・それさえあれば、我らは、まだ・・・！」

そう言って、空から二人、地上に二人、合計四人が一斉に刀を構

えて斬りかかってくる。

「え、王族って、え？　ちょっと、待……」

「……大丈夫じゃ」

その言葉に応じるように、乾いた銃声が鳴り響く。

「え……？」

宮彦が恐る恐る目を開くと、斬りかかってきたはずの男が、右手を撃たれ、地面の上でもがき苦しんでいた。

「残り三人とも、武器を捨てなさい！」

物陰から飛び出してきたのは、教室で見たスーツ姿のままの、岩笠だった。

「岩笠先生……何故？」

宮彦の声に、岩笠は一瞬そちらを向いたが、すぐに視線は黒マント達へと向けられる。

「あなた達の護衛……と言っても、今回はたまたま居合わせただけかしらね」

そう言った岩笠は、再び「武器を捨てなさい！」と残り三人に警告するが、男たちは応じる気配がない。

「不意を取った程度で……愚かな」

「とはいえ、われらの内の一人がかけたのは事実……ほめてやるぞ、地球人」

その瞬間。

「……！　伏せろ……！」

「……え？」

いきなり叫ぶカグヤ。

しかし、遅かった。

背後に回った男二人に峰で殴られた岩笠は、声にならない悲鳴を上げた。

一撃を加えたのは、先ほど宙を飛んでいた二人だ。

「クソッ……こんな……」

悔しそうにする岩笠を、二人の男が見下ろす。

「さて・・・体が痺れてしばらく満足には動けまい」

「この男が死ぬ様を、そこでゆっくり見るがよい」

そう言つて、宮彦の方に二人は近寄る。

「え・・・ちよつと、待つ・・・」

後ずさる宮彦の肩を、もう一人の黒マントががっしりと掴む。

「な・・・？ え・・・？」

「宮彦っ・・・くそっ！ 離せ！！」

カグヤも、先ほど肩を撃たれた男に、後ろ手に拘束されている。

「さらばだ・・・」

ゆつくりと振り下ろされる刃。

その刃が振り下ろされるその瞬間。

「宮彦お！！」

カグヤの、声が聞こえた気がした・・・

【第十八話】災いの災難（後書き）

）DEAD END（

短い間ご愛読ありがとうございました、したならば13号先生の次回作にご期待下さい。

・・・嘘です、ごめんなさい（謝

中々アイデアが出てこなくて数日かかったちゃいました・・・まあ、

PCがぶっ飛んだり色々あったわけですが・・・

では、本日はこれにて・・・

【第十九話】災いを守る者

死の間際に、周りの時間がやけにゆっくり流れていく。

そんな表現を、宮彦も何度も本で目にした。

それまでは「そんな馬鹿な」と、まるで信じていなかったが、この時宮彦は、それが本当だったことを嫌というほど思い知った。

ゆっくりと振り下ろされる白刃。

普段なら肉眼で捉えることすらできないはずのその動きを、宮彦の目はハッキリと捉えていた。

しかし、体を動かそうなどとは思えなかった。

動かそうとしても、その動きはこの刃の動きよりも遥かに緩慢で、刃を避けることなど叶わぬだろう。

迫りくる白刃の切っ先を目にしながら、宮彦はぼんやりと考える。

俺はここで、死ぬのだろうか？

そう考えた瞬間、短い人生の出来事の一つ一つが、目の前を走っていった。

「走馬灯が走る」とはこういう事の事を言うのだろうか。

実物のそれを見た事がないため、その比喻が自分が体験しているものを指すのかどうかは良く分からなかった。

目の前を、次々と思い出が走っていく。

父さん、母さん、先に逝ってしまった爺ちゃん、そして・・・

目の前に流れる光景は、やがて宮彦の大切な人々へと変わっていく。

そして、

カ・・・グヤ・・・？

最後にその瞳に映ったのは、黒い髪の少女。

カグヤ？ いや、違う、カグヤならそこで泣いているじゃないか。

視界の隅で、黒マントに羽交い締めになれながらもこちらに手を伸ばしながら、叫ぶカグヤの姿が見えた。

悪いな、こんな終わり方で。

王宮にこれまでもずっと閉じ込められていたんだ、もう少し、色々な所に連れて行ってやりたかった。

もう少し、ワガママを許してやっても良かった。

もう少し、面白い話を聞かせてやりたかった。

そして、もう少し・・・

ああ、そうか、俺は・・・

「宮彦お！！」

自らの中の彼女の存在の大きさを理解したその瞬間。

刃がその脳天に振り下ろされるその時、カグヤの声が、聞こえた気がした。

「宮彦お！！」

叫ぶ。

もう間に合わないことなど頭では理解できている。

叫ぶ事でその刃が止められるはずもない。

だが、しかし、叫ばずにはいらなかった。

体が、魂が、沈黙を拒否した。

振り下ろされる刃を前に、それ以外は何もできなかった。

彼女の目の前の宮彦は、呆けたように刃を見ているだけだった。

かわそうと、しない。

最早、全てが終わった。

そう、諦めかけ、瞼を閉じた瞬間だった。

「やれやれ、通常監視に切り替えた途端にこれかい？」

飄々《ひょうひょう》とした声と共に、鈍い金属音が響きわたる。

恐る恐るカグヤが^{まぶた}瞼を開くと、そこには、彼女が待ち望んでいた姿があった。

「姫、遅くなりました・・・申し訳ございません」

「遅い・・・それから、私は既に姫ではない、気づかいは無用じゃ」
黒マントの刀を叩き折った月野を、カグヤは軽くたしなめた。

自らの脳天に振り下ろされるはずだったはずの刃が叩き折られ、
その持ち主が崩れ落ちるのを、宮彦は呆けた目で見ていた。

目の前には、彼らと同じような日本刀を携えた優男。

頭の後ろで小さく括ったその髪は、月野のそれに他ならない。

「讃岐君も、悪かったね・・・怖い思いをさせてしまったようだ」

こちらを慮る月野の言葉にも、ロクな反応が返せないほど、宮彦
は呆然としていた。

「先生が・・・何故？」

やっと出た言葉は、それだった。

「何故、か・・・ま、彼女と君を守るのが仕事だからね、教員と言
うのは裏の顔さ」

月野は質問に答えながらも、さらにもう一人の黒マントの刃をは
じきつつ、峰で強打しノックアウトする。

「ちっ・・・動くな！ 動けばこの者の命はない！」

「そ、そうだ！ 動くなよ・・・」

残された二人は状況が不利と見るや否や、カグヤを人質に取り、
逃げに入った。

「分かった・・・」

「まずは武器を置け！」

男のその指示に従い、月野は刀を手から離す。

「・・・と、言う訳にもいかないんだよね、職務上さ」

月野は先ほどの男の内の一人がやって見せたように、彼らの背後
に一瞬にして回りこむと、ほぼ同時に二人の首筋に強打を叩きこ
む。

「がっ・・・！」

「貴・・・様・・・！」

黒マント二人が崩れ落ちるのと、月野が手から離れた刀が地面に落ちて鈍い音を立てたのは、ほぼ同時だった。

「恨まないでくれよ、これも仕事だからね」

【第二十話】災いの赦し

落ち付いた雰囲気のレストラン。

店内にはジャズが流れ、いわゆるアンティークと呼ばれる調度類と共に、ゆっくりと流れる独特の空気を演出していた

客はたった三人、宮彦とカグヤ、そして・・・

「あのー・・・一つ聞いても良いですか？」

「うん？ なんだい？ この上のものなら何でも食べていい、全部私がおこるよ」

そう言いながら、テーブル一面に並べられたパフェ、アイス、スフレ、ババロアといった菓子の類に次々と手を伸ばし、自ら猛烈な勢いで消化していく月野に、宮彦は恐る恐るといった感で聞く。

「先生は・・・何者なんですか？」

その問いに、月野はピタリとデザートスプーンを操る手を止める。

「フム、詳しい経緯を離すと長くなるけど・・・大まかな目的は、岩笠先生と同じかな」

結局あの後黒マントを全員引き取った警官隊と合流した後、岩笠は早々に引き揚げ、残された彼らは一通り事情聴取を受けたのち、月野の案内でこの喫茶店へと連れてこられたのだ。

「もともと陰から君たちを監視していたんだが、先日地球におけるある急進派の最大拠点を壊滅させ、また、姫 もとい、カグヤ君への他の急進派の働きかけがここに来てからというもの全くないことから、監視を特別監視から外出中のみの通常監査に戻したわけだ」

そこまで一口で一気に話すと、一息ついてミルフィューを頼張る。「で、だ、壊滅させたはずの連中の拠点から逃げ延びた四人が、偶然にも通常監視に移ったばかりの君らに関するミッシェンの資料を命からがら持ち出し、君らを襲った、ということだ」

「は、はあ・・・ちなみに急進派ってなんですか？」

聞かれた以上の事柄と共に、月野の口から出てきた聞きなれぬワードに、宮彦は疑問を口にする。

「良い質問だね。急進派というのは、月本国において地球に対して強硬な姿勢を取るべし……といった派閥の事だ。まあ、圧倒的に少数な上、その過激すぎる行動からほとんどのヤツらが世間からキワモノ扱いされてて、世論の賛同を受けているのは事実上全くの皆無と言って良いね」

出来の良い生徒を褒める教師の表情で答える月野。

「そうなんですか……え、と……」

何か言いたげな宮彦の態度に、月野はその原因となった自らの言動に気付く。

「ああ、ここでこんな大声で月の本国についてべらべら喋っていてもいいのか、ということか」

先ほど店内には彼ら以外の客はいないと書いたが、当然マスターは居る。

その上、ウェイターの青年も、どう考えてもこちらの声の聞こえる範囲に居る。

「大丈夫さ、ここは知る人ぞ知る名店、平日のこの時間は誰も来ないし、それに、そこに居る彼も、月の出身で、マスターもそれを知って雇っているんだ」

壁の傍の青年を指さし、月野は言う。

「だから、ここで月の話をしようが一向にかまわないってことさ」

またもう一つタルトを手に取ると、口へと運ぶ。

この男、このヒョロとした体のどこにこれほどの量を納めているのだろうか。

そんな月野の姿に少々あきれながら、宮彦はまた問う。

「じゃあ、あの黒マントが飛んでたのは何故なんですか？」

あの四人のうち、二人は明らかに重力を無視して空中に浮遊していた。

羽根もエンジンもノズルもつけずに宙を舞うなど、まず地球の科

学力では不可能なはずだ。

そう、地球の科学力では・・・

「フム、多分君の思っている通りだが、あれは月の科学力によるもので、重力制御装置の応用によって浮遊していたんだ」

重力・・・制御？

「たとえば私の履いているこれなんかもそうだ」

そう言つて、月野は自らの靴を示す。

「最後に瞬間移動みたいなことをして見せただろう？ あれだってこれのちよつとした応用さ」

「もつとも、扱いに相当熟練した者でないと無理なんだけどね」と、悪戯っぽい笑みを浮かべながら人差し指を天に向ける月野の正面・・・つまり、宮彦の隣に座るカグヤが、パフェをスプーンですくいながら会話に割り込む。

「地球ではどうか知らんが、月では至極一般的な技術じゃ。そもそもアレがなければ、我々は地球に降りた時点で地面にへばりつくこととなる」

「・・・？ どういう意味だ？」

その言葉の意味するところが分からず、宮彦は聞き返す。

「つまりだ、宇宙飛行士なんかは宇宙船の中で筋力トレーニングを行うだろう？ あれはなんでだと思つ？」

「そりゃ筋力を落とさないために・・・」

「じゃあ、筋力が落ちるのはなぜだい？」

「なぜって、宇宙空間だ・・・から・・・って、あ！ 成程」

月野のフォーローに、宮彦はようやく納得したような顔をする。

「そう言う事・・・元々本星の天変地異が解消した際、本星へと戻るつもりだった我々は、月の内部重力を重力制御装置によって本星と全く同じにしたんだ」

「されど本星は我らの星系の太陽ごと爆砕・・・からくも逃げ出した我らは、脱出のどさくさで他の船とも別れてしまい、そして偶然にも、本星とほとんど同じ直径、質量、大気組成のこの星の重力圏

に捕まったのじゃ」

「へえ……」

空飛ぶ靴の話から急に飛んだ話に驚きながら、宮彦は小さく息を吐く。

「おっと、もうこんな時間か」

彼らの周りに流れる空気が凍結しかけたその時、月野が唐突に声を上げる。

話し込んでいる間に、時刻は七時を回ろうとしていた。

「一応、親御さんに連絡はしてあるが、念のために今日は私が家まで送って帰ろう。先に出ていてくれ、お代を払わなくちゃならない」
テーブルの上のデザートは、その殆どが月野の腹へと納められた後だった。

宮彦の家の前。

月野に礼を言い、先にドアを開けて家へと足を踏み入れる宮彦に続こうとしたカグヤは、月野に呼び止められる。

「少し……よろしいですか？」

「どうしたんだ？」とドアから顔だけ出した宮彦に「少し話してから入る」と返事をして、カグヤは月野の方へ向き直る。

「どうしたのだ？」

「少し……窺いたいことがございました」

先ほどのやんわりとした物腰ではあるが、少し鋭い雰囲気を漂わせる月野に、カグヤは表情を硬くする。

「月に……帰りたくはございませんか？」

「……どういうことだ？」

その言葉の意図が分からず、カグヤは聞き返す。

「まさか……あの者の命か？ あらぬ罪を妾になすりつけ、そして父を……！」

「お止めくださいませ。閣下があの様な事をなさつたのには、訳が……」

「訳じゃと!? ふざけるな! あのような事、決して許されるものでは……!」

わめくカグヤを諭すように、やんわりと月野は彼女の言葉を断ち切る。

「姫様……少々落ち付いてください。良いですか? 急進派は現在地球においてほとんど壊滅したと言っても過言ではありません。また、月本国においても閣下により急進派はほぼ一掃されようとしています。以前に比べて、そう、お父上が倒れたばかりのころに比べれば、本国の状況も安定してまいったのです。月へと帰るなら今しか……」

「嫌じゃ」

その言葉に、月野はキョトンとする。

「今、何と……?」

「嫌じゃと申したのじゃ、妾はここにおる」

「そうですか、やはり、彼を……」

「つ、月野!」

「それが姫様の意思なら止めは致しませぬ。しかし……」

そこで一旦月野は言葉を切る。

「またこのような事が起これば、それこそ彼を 讃岐君を巻き込みかねません」

「……!」

たたみかけるように月野は続ける。

「今現在は罪人と言う事になり王位継承権もはく奪されているため急進派からもそれほど重要視されてはいませんが、罪が無根のものと同知れば、急進派も目を付けるでしょう」

「し、しかし今、急進派は壊滅状態じゃと……本国からも一掃されておると」

その言葉を、またも月野は切る。

「あくまでそれは組織での話です。大規模な組織を失えば、当然ゲリラ的な活動も増えて参りましょう。そうなれば、大規模な反抗は減少しましょうが、こういった小規模な作戦が増えてくるものと思われます」

「し、しかし・・・」

「本国から一掃されれば、当然地球へ行く者もありましょう」

やがて数秒の沈黙が流れたのち、カグヤはゆっくりと口を開く。

「月へ・・・帰れるのか？」

「はい、閣下はすぐにでもあの時の事実を、国民に告げる用意がある、と」

あの時の、事実。

自分もまだ知らないあの事件の全貌を、ヤツは、本当に？

「考えておく・・・」

「は・・・では、そうお伝えしておきます」

それだけ告げると、月野は闇の中へとかき消えていった。

「妾は、そうか・・・帰れるのか」

待ち望んでいたはずの、自らの罪の晴れる日。

しかしどうして。

どうして、どこかさびしいのだろう。

何かが、欠けている。

今思い返しても、あそこでの生活では、やはりどこかが欠けている。

彼女には、そう思えてならなかった。

【第二十一話】災いと海（前編）（前書き）

よく来たね、まずは少し話を聞いてほしい。

この話を書いていた時点ではお盆休み真っ最中、愚かな作者は、取材旅行と称してホントに無人島にも行って来たんだ。

でもね、気づいてみたら早九月になろうとしていて、虫の音すら聞こえてくる始末さ。

滑稽だろう？　どうかこの無様な作者を笑っておくれ・・・ははははは・・・

・・・いや、ほんとすいません・・・

書いていた時はホントに夏真っ盛りだったんです、いやホント。

と、いうわけで、この話を読む際にはあの楽しい数週間前の夏休みやお盆休みを思い出しながら読んでいただくとありがたいです。

では・・・

【第二十一話】災いと海（前編）

目の前に広がる青い海、広い空、そして・・・

「ここは・・・どこ？」

見渡しても民家どころか灯り一つ見当たらない、一面の砂浜。

「ぐすつ・・・わからないわよう、そんなこと・・・」

そして傍らで泣きじゃくる銀髪の少女。

どこだか分らない砂浜の上で、隣に座る水着姿の命と共に、宮彦は海パン一丁で途方に暮れていた。

待て、落ち付いて状況を整理しよう。

深呼吸して、宮彦は意識を落ち着かせる。

どのような混沌とした状況においても、何事にもそうなった原因がある・・・そう、今回のことにも、当然原因があるのである。

そう、原因は・・・

原因は、つい先日のお電話だった・・・

「・・・海？」

電話の向こうの命からの誘いに、宮彦は思わず声を上げた。

『ええ、私共のプライベートビーチで、一緒に・・・と思いましたが』

プライベートビーチ・・・

一般庶民の生活をしていると聞きなれない言葉ではある。

「でも、いいの？ お邪魔しちゃって・・・」

『かまいませんわ、別荘も丁度何部屋か空いていますし、クルーザーも去年買い換えたばかりでして・・・』

別荘・・・クルーザー・・・？

このお嬢様の口からは、よくもこんなに一般庶民の家では耳にし

ない言葉が次々と飛び出すものだ。

『あ、でも、くれぐれも安形さんにはこのことは……』

「え……どゆこと？」

カグヤが……どうかしたのだろうか？

『あつ、いつ、いえ、なんでもございません……』

「ああ、そう……」

どこか慌てふためいているような感じではあったが……まあ、深くは聞かないことにしておく。

『じゃあ、明後日の朝……お迎えにあがりますわ』

「ああ、わかった……じゃね」

『ええ、また……』

最後に、そんなマニュアル通りの言葉を交わして受話器を置くと、背後から声をかけてくる者がいる。

「のう、宮彦」

「うん？」

そちらの方を振り向くと、何か困ったような顔のカグヤがいた。

「海に……行くのか？」

「う、ん……たぶん」

天候次第ではなんとも言えないので一応濁しておく。

「妾も……連れていつてはくれぬか？」

「え？ 頼んであげなくはないが……そりゃなんで？」

「うむ、映像で見たことはあっても、海と言うものを実際に見たことはなくてな」

成程、月の内壁に建造物が建っている月では、いくら重力制御ができると言っても構造的にも面積的にも海を作るのは不可能だろう。そのような面積を使うぐらいなら、一人分でも避難できるスペースを増やした方が良い。

「できぬか……？」

少し不安げに宮彦の顔を覗き込んでくるカグヤ。

成程、あの雄大さを知らぬというのはもったいない。

「わかった・・・俺から何とかして池速さんにかけてみるよ」
「本当か？」

そう言つと、カグヤは、ぱあっと顔を輝かせた。

当日、驚くほど長いリムジンが、早朝から宮彦の家の前の小狭い道路を占領していた

「こ、これは・・・」

「ほう、随分と胴長な車だのう」

宮彦とカグヤが車の前で呆然としていると、全部座席から命が降りてくる。

「おはようございます、讃岐君、そして・・・」

チラとカグヤの方に視線をやると、命は小さくため息をついた。

「ふう・・・やっぱり付いて参りましたわね、余計なおマケが・・・」

「

「え？ なにか・・・」

カグヤの姿を認めた途端、何か命が呟いた気がするが、質問しようとする「なんでもありませんわ」と遮られた。

確かに昨日連絡しておいたハズなのだが・・・

「まあ、いいですわ・・・さ、お乗りになってください」

命がそう言つと、傍に控えていた黒服がリムジンのドアを開ける。

「あ、ありがとうございます・・・」

そう言つと、黒服は無言で会釈してきた。

なんだかこちらが恐縮してしまう。

「それにしても・・・」

宮彦は、自らの前のシートに視線をやる。

「なんでお前までいるんだ？」

「ん？」

ジューズの入ったグラスを傾けていた一二三は、不思議そうにこ

ちらを向く。

「なんでって・・・池速さんに誘われたんだよ」

「いや、そうじゃなくて、お前って池速さんと知り合いだったか？」

「

一二三は、男子の友人は驚くほど多い。

学級の男子ほとんどの交遊関係があるのではないかと思わせるほどで、少なくとも宮彦の五倍は顔が利く・・・が、女子にそれほど顔が広いほどでもなく、命とだってあの料理勝負が初対面だったハズだ。

「あー・・・そういや面識あんまないなあ」

「旧友の私はともかく、コイツはたしかに招待されるのはおかしいわよね」

一二三の隣の席から、雅子が口を出してくる。

「だろ？ それに・・・」

そう、それに、さらに不可解な事がある。

「なんでお前たちまでいるんだ？」

宮彦が指さしたその先。

「うん？」

磯野は、文庫の推理小説を置きながら。

「えっ？」

島は、やけにオロオロしながら

「うーん・・・成り行き、かな」

大友は困ったように微笑みながら。

「あん？」

阿部は、何故か喧嘩腰に。

カグヤ争奪戦で宮彦としのぎを削ったはずの四人が、何故かそこに居た。

この時はこの場にいる全員が、そして困難に巻き込まれていく当
の本人の宮彦さえ、あのような事件が起こるなど、思いもしなかつ
たのだ。

そう、まさかあのような事件が起こるなど・・・

【第二十一話】災いと海（前編）（後書き）

いかがだったでしょうか？

あからさまに季節外れてますよねー・・・しかも尻切れ蜻蛉・・・

OTL

では、次のお話でまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6390e/>

新説！？竹取物語

2010年10月9日04時37分発行